

令和5・6年度

「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」

研究成果報告書

学校法人星槎 SEISA アカデミー

令和7（2025）年3月



## ☆目次

<b>I 背景</b>	
1 特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業	3
2 SEISA アカデミーの歩み	4
3 星槎沿革	6
4 教育振興基本計画では	8
5 CSTI では	10
6 特定分野に特異な才能のある児童生徒	13
<b>II 研究成果報告</b>	
1 研究概要	15
2 現状分析と取り組み内容	16
3 研究体制	18
4 児童生徒の実際	19
5 年間行事予定 2023/2024	21
6 年齢に応じた学習成果目標の達成方法	23
7 教育課程の考え方1 通常授業	25
8 教育課程の考え方2 特別授業	28
9 教育課程の考え方3 特別活動	34
10 協働的学びの実証結果	38
11 家庭との情報共有	42
12 学修状況の把握や評価	44
13 本籍校との関り	47
14 児童生徒の変化	47
15 2E 対応 SEL	52
<b>III 事業のまとめ</b>	
1 運営指導委員会委員より	57
2 今後の展望	65

※本報告書は、2か年にわたる文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」における実証研究内容を再構成して、当該児童生徒へのよりよい支援を実現するために、細部状況を含めてまとめたものです。多くの関係者に研究成果が共有され、新たな取り組みが広がることを期待しています。

# I 背景

## I-1 特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業

### 1. 事業概要（令和6年度 文部科学省 Web サイトより）

特定分野に特異な才能のある児童生徒（以下「特異な才能のある児童生徒」という。）は、その才能や認知・発達の特性等がゆえに、学習上・学校生活上の困難を抱えることがあると指摘されています。しかし、これまで我が国の学校において、特異な才能のある児童生徒を念頭においた支援の取組はほとんど行われてきませんでした。

このため、本事業では、こうした児童生徒への支援方策を開発し推進するため、多様性を認め合う個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の一環として、(1)～(4)に掲げる特異な才能のある児童生徒に対する支援に関する取組を実施します。

- (1) 特異な才能のある児童生徒に関する研修パッケージの作成
- (2) 特異な才能のある児童生徒の特性を把握するツールや特異な才能のある児童生徒の支援に資するプログラム等のデータ収集・整理
- (3) 特異な才能のある児童生徒に対する指導・支援に関する実証研究
- (4) 特異な才能のある児童生徒の指導・支援を行う教職員・保護者を対象とする相談支援に関する実証研究

### 2. 採択団体 ※取り組み分野後の（ ）内数字は採択数

令和6年度特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業採択団体

#### (1)特異な才能のある児童生徒に関する研修パッケージの作成 (1)

国立大学法人愛媛大学

#### (2)特異な才能のある児童生徒の特性を把握するツールや特異な才能のある児童生徒の支援に資するプログラム等のデータ収集・整理 (1)

株式会社ユーミックス

#### (4)特異な才能のある児童生徒に対する指導・支援に関する実証研究 (9)

鎌倉市教育委員会 京都市教育委員会 学校法人星槎(SEISA アカデミー)

国立大学法人筑波大学 国立大学法人東京学芸大学 長野県教育委員会

名古屋市教育委員会 八王子市教育委員会 国立大学法人三重大学

SEISA アカデミーでは、上記の通り令和5・6年年度この事業に採択され実証研究を進めてきました。

## I-2 SEISA アカデミーの歩み

### 「科学する学校構想」

「科学する学校構想」とは星槎グループ名誉会長である故宮澤保夫先生が提唱した革新的な教育理念に基づくものです。この構想は、生徒が本物の大人や企業のこだわりに触れ、実際の「本物」を目の当たりにすることを重視しています。また、発見や探求にワクワク・ドキドキしながら学べる環境を提供することが、最も大切にされていました。

この学校は、学齢に関わらず、個々の興味と能力に応じて自由に学び始めたり、学びを深めたりできる教育環境を提供することを目指しています。学年制や学習指導要領に縛られることなく、個人の力を最大限に引き出すことができる学校を創設することを目標としています。

具体的には、無学年制の小中高一貫教育を導入し、教科ごとの飛び級制度を設けることで、個々の生徒が秀でた能力を存分に発揮できるカリキュラムと、充実した探究環境を提供する予定でした。この構想は、神奈川県と協力し、国家戦略特区で申請を行う計画で進められていました。

学校の特徴としては、以下の点が挙げられます。

- ① 生徒が関心のある授業を自由に選択し、個々の力を発揮できる柔軟な学び方を提供するオリジナルのハイパースクールを目指すこと。
- ② 企業との連携によるサイエンスプログラムの実施。
- ③ 留学生や外国人の子息が共生するグローバルコース（公用語は英語）を提供すること。

このようなビジョンのもと、現在、星槎グループ蓮田亮大本部長、星槎中学校龍拓馬教務主任、星槎高等学校藺隆太教頭とともにプロジェクトを進めていました。しかし、発起人である宮澤名誉会長の逝去により、この構想は段階的に進行することとなりました。それでも、このプロジェクトは今後も引き続き推進され、独自の教育環境を提供する学校の実現を目指しています。

### 海外状況調査開始

2022年3月から、海外のギフテッド・タレンティド教育および2E教育について調査を開始しました。その結果、世界83カ国でギフテッド・タレンティド教育が実施されていることが確認され、特にアメリカ合衆国、シンガポール共和国、中国、台湾が先進的な取り組みを進めていることが分かりました。しかし、世界的には、ギフテッド・タレンティド教育が特別支援教育の一環として位置づけられている場合が多く、特に2E

(発達障害とギフテッドの両方を持つ)教育に関しては実施している国が限られていることがわかりました。

この調査を通じて、星槎が取り組んでいる発達のアンバランスに対するアプローチと、特異な才能を伸ばす教育の重要性を再認識しました。さらに、この取り組みが世界的に求められていることを実感しました。この理解を深めるため、星槎グループの石田氏がアメリカ合衆国に渡り、現地のギフテッド教育の実態を視察しました。

## SEISA プレアカデミー開始

2019年7月に、児童生徒が自分の興味や関心を深く追求できる場を提供するために、月に一度の教科横断型・探究型の授業を外部の児童生徒向けに実施しました。この取り組みは、教職員の授業力向上を目的とした研鑽の場としても活用され、教科横断型の授業を行うためのスキル向上にも寄与しました。その後、3年間にわたり指導力の向上に努めました。転機となったのは2022年6月、平日の放課後に授業を開始したことです。これにより、多くの児童生徒がプレアカデミーを利用するようになり、特異な才能を持つ児童生徒にとって、居場所が少しずつ形成され、自信を持って自分の力を発揮できる場が提供できるようになったことを実感しています。

## SEISA アカデミー開設

先に掲げた「科学する学校設置プロジェクト」の取り組みを少しでも早く、かつ現在星槎が持っているリソースを活用して、今まさに社会に求められている学びの場を創るための取り組みとして2023年3月にSEISA アカデミーを開設しました。

この取り組みは、文部科学省 令和5年度「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」に採択されるとともに、第一期生5名入学（第一期秋生1名入学）でスタートしました。翌年度は第二期生10名を迎え、文部科学省 令和6年度「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」に採択され、教育実践を進めつつ実証研究に取り組んできました。

## I-3 星槎の沿革

星槎では、以下に示す通り社会と教育の課題に、設置する教育施設を通じて取り組んできました。以下の表では設置する学校関連の沿革を示しています。

西暦	星槎学校関連沿革
1972	ツルセミ開設
1983	
1984	
1985	宮澤学園高等部開校
1986	学校法人国際学園設立（ピーターパン幼稚園）
1987	横浜国際福祉専門学校開校
1988	
1989	
1990	
1991	宮澤学園高等部総合コース開設
1992	宮澤学園高等部青葉コース開設
1993	宮澤学園昂校開設
1994	
1995	宮澤学園高等部青葉校開設
1996	
1997	宮澤学園高等部湘南校開設
1998	
1999	星槎国際高等学校開校（芦別、札幌、横浜、大阪、福井） ※宮澤学園<星槎学園改称
2000	星槎国際高等学校 GC 開設（郡山）
2001	星槎国際高等学校 GC 開設（福岡）、OSA 開校
2002	星槎国際高等学校 GC 開設（宮山）
2003	星槎国際高等学校 GC 開設（浜松）
2004	星槎大学開学、星槎国際高等学校 GC 開設（仙台、立川、広島、沖縄）
2005	星槎中学校開校、星槎国際高等学校 GC 開設（当別、横浜鶴居）
2006	星槎高等学校開校、星槎国際高等学校 GC 開設（厚木）
2007	星槎学園高等部横浜ポートサイド校・大宮校開校、星槎国際高等学校 GC 開設（福岡西）
2008	星槎国際高等学校 GC 開設（八王子）
2009	
2010	
2011	星槎学園北斗校開校（昂校、青葉校統合）
2012	星槎名古屋中学校開校
2013	星槎大学大学院修士課程開設
2014	星槎もみじ中学校開校
2015	星槎国際高等学校 GC 開設（湘南、名古屋）
2016	星槎国際高等学校 GC 開設（高松）
2017	星槎大学大学院専門職修士課程開設（専門職大学院）、星槎国際高等学校 GC 開設（札幌北、帯広）
2018	星槎国際高等学校 GC 開設（丸亀、小田原）
2019	星槎国際高等学校 GC 開設（芦別、静岡、川口）
2020	星槎大学大学院博士後期課程開設、星槎国際高等学校 GC 開設（甲府）
2021	星槎国際高等学校 GC 開設（北広島、那覇）、学校法人星槎こども園 KIDS planet 設立
2022	星槎国際高等学校 GC 開設（北九州）、学校法人星槎 設立
2023	SEISA アカデミー開設 令和5年度特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援事業採択
2024	SEISA アカデミー 令和6年度特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援事業採択

2-1 管理教育への挑戦
2-2 不登校への挑戦
2-3 発達障害への挑戦
2-4 インクルーシブ教育への挑戦

和暦	教育課題に関する話題	不登校 (小中)	社会情勢等
昭和47年	暴走族という言葉が警察公文書に使われる		
	1980 文部省校内暴力で通知		1975 ヤンキー1979 金八先生 1980 ツッパリ
昭和58年	戸塚ヨットスクール事件		
昭和59年			
昭和60年	児童数減始まる		尾崎豊「卒業」
昭和61年			
昭和62年	ポケベル普及		THE BLUE HEARTS「リンダリンダ」
昭和63年			
平成元年	チーマーという言葉が出てくる		リゲイン「24時間、戦えますか」
平成2年	学習指導要領「生活科」導入		
平成3年	登校拒否・不登校の問題	5.4万	東西冷戦終結 バブル崩壊
平成4年	学校5日制(月1回)開始	5.8万	
平成5年	文部省「業者テスト排除」通知	6万	マット死事件
平成6年	文部省いじめ対策緊急会議	6.1万	高校総合学科制度化 サラマンカ声明
平成7年		6.5万	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件
平成8年	ドロール報告(学習の四本柱)	7.4万	
平成9年		8.4万	
平成10年	不登校 10万人突破	10.1万	Windows98 携帯電話所持率 50%超
平成11年	中等教育学校制度開始	10.4万	
平成12年	学習指導要領「生きる力」ゆとり教育	10.7万	総合的学習の時間 MDGs
平成13年	文部省、文部科学省に改組	11.2万	小泉内閣 池田小事件
平成14年	学校5日制	10.5万	構造改革特区 Google 創業
平成15年	PISA ショック	10.2万	携帯電話所持率 90%超える
平成16年	発達障害者支援法	10万	Facebook 提供開始
平成17年	文科省 不登校へ本格的対応開始	9.9万	大学進学率 50% Youtube 提供開始
平成18年	教育基本法改正(各学校の目的)	10.3	Twitter 提供開始
平成19年	学校教育法改正 特別支援教育	10.5万	教職大学院 郵政民営化 iPhone 発売
平成20年		12.6万	モンスターペアレント話題
平成21年	教員免許更新制開始	12.2万	民主党に政権交代
平成22年	学習指導要領脱ゆとり(時間数増加)	11.9万	生徒指導提要
平成23年		11.7万	東日本大震災 LINE 提供開始
平成24年		11.2万	大学の質的転換答申(学習→学修)
平成25年	不登校再び増加へ	11.9万	いじめ防止対策推進法
平成26年		12.2万	障害者権利条約批准
平成27年		12.5万	仁川宣言 SDGs
平成28年	義務教育学校制度開始 倉敷宣言	13.3万	
平成29年		14.4万	
平成30年	引きこもり総数 100万超	16.4万	Society5.0
令和元年	GIGA スクール構想	18.1万	
令和2年	学習指導要領「主体的対話的で深い学び」	19.6万	COVID-19 世界に拡散
令和3年	令和の日本型学校教育答申	24.4万	障害者差別解消法の改正(合理的配慮の提供義務)
令和4年	教員免許更新制廃止	29.9万	生徒指導提要改訂版
令和5年		34.6万	
令和6年	星槎国際高等学校 GC 開設(旭川)	R7/12 発表	通信制高校生徒数 29万0,118人(全高 校生の 10.0% 10人に一人)

2-1 管理教育への挑戦
2-2 不登校への挑戦
2-3 発達障害への挑戦
2-4 インクルーシブ教育への挑戦

上記表は、着目すべき教育課題や社会状況を色別に示しています。前頁と併せてご覧ください。

## I-4 教育振興基本計画では

令和5年6月16日に閣議決定された、第4期教育振興基本計画（FY2023-FY2027）では、特異な才能のある児童生徒の支援指導について「今後5年間の教育政策の目標と基本施策」において以下のように記載されています。

16項目あげている目標の中で、目標7 多様な教育ニーズへの対応と社会的包摂 15個の基本政策のうち7番目に

### ○特異な才能のある児童生徒に対する指導・支援

・特異な才能のある児童生徒について、学習や生活上の困難に着目し、その解消を図るとともに個性や才能を伸ばす。そのため、特異な才能のある児童生徒の理解のための周知・研修の促進、多様な学びの場の充実、特性等を把握する際のサポート、学校外の機関にアクセスできるようにするための情報集約・提供及び実証研究を通じた実践事例の蓄積等に総合的に取り組む。【指標】記載なし

とされています。目標となる指標の記載はなかったものの、「特定分野に特異な才能のある児童生徒（以下「特異な才能のある児童生徒」という。）は、その才能や認知・発達の特性等がゆえに、学习上・学校生活上の困難を抱えることがあると指摘されています。しかし、これまで我が国の学校において、特異な才能のある児童生徒を念頭においた支援の取組はほとんど行われてきませんでした。」という認識が共有された中で、具体的取り組みが当該推進事業を踏まえ展開されていくことを期待しています。

### 【今後5年間の教育政策の目標と基本施策】

目標1 確かな学力の育成、幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成

目標2 豊かな心の育成

目標3 健やかな体の育成、スポーツを通じた豊かな心身の育成

目標4 グローバル社会における人材育成

目標5 イノベーションを担う人材育成

目標6 主体的に社会の形成に参画する態度の育成・規範意識の醸成

**目標7 多様な教育ニーズへの対応と社会的包摂**

目標8 生涯学び、活躍できる環境整備

目標9 学校・家庭・地域の連携・協働の推進による地域の教育力の向上

目標10 地域コミュニティの基盤を支える社会教育の推進

目標11 教育DXの推進・デジタル人材の育成

目標12 指導体制・ICT環境の整備、教育研究基盤の強化

目標13 経済的状況、地理的条件によらない質の高い学びの確保

目標 14 NPO・企業・地域団体等との連携・協働

目標 15 安全・安心で質の高い教育研究環境の整備、児童生徒等の安全確保

目標 16 各ステークホルダーとの対話を通じた計画策定・フォローアップ

【多様な教育ニーズへの対応と社会的包摂 15 個の基本政策】

○特別支援教育の推進

○不登校児童生徒への支援の推進

○ヤングケアラーの支援

○子供の貧困対策

○高校中退者等に対する支援

○海外で学ぶ日本人・日本で学ぶ外国人等への教育の推進

○特異な才能のある児童生徒に対する指導・支援

○大学等における学生支援

○夜間中学の設置充実

○高等学校定時制課程・通信制課程の質の確保・向上

○高等専修学校における教育の推進

○日本語教育の充実

○教育相談体制の整備

○障害者の生涯学習の推進

○障害者の文化芸術活動の推進



## I-5 CSTI では

内閣府総合科学技術・イノベーション会議（Council for Science, Technology and Innovation）教育人材育成ワーキンググループでは、令和4(2022)年6月2日 Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージが策定されました。

政策パッケージでは、3つの政策があげられ、＜政策2＞において、特異な才能のある子供に関する取り組みが明確に示されました。

### 3. 3本の政策と実現に向けたロードマップ

＜政策1＞子供の特性を重視した学びの「時間」と「空間」の多様化

＜政策2＞探究・STEAM教育を社会全体で支えるエコシステムの確立

●探究・STEAM教育を支えるエコシステム

●特異な才能のある子供が直面する困難を取り除き、その子供の「好き」や「夢中」を手放さない学びの実現

- ・目指すイメージ
- ・課題、必要な施策・方向性、実施体制
- ・ロードマップ

＜政策3＞文理分断からの脱却・理数系の学びに関するジェンダーギャップの解消

政策2の中には以下の9つの施策とロードマップが示されています。

#### 【9つの施策】

- 1-1 社会、学校、保護者における特異な才能のある子供に対する理解・認知
- 1-2 学校外プログラムに公正に参加できる仕組みや学校外プログラムへの参加が本人の教育課程上の学習ポートフォリオへ位置付けられる仕組みの構築
- 2 大学に飛び入学した際の高校卒業資格の付与
- 3 特異な才能のある生徒を積極的に受け入れる大学入試の推進
- 4・5 高等専門学校、SSH指定校、専門高校等における特異な才能のある子供の受け入れ
- 6 高校における他の学校での学習の単位認定制度の改善、活用の推進
- 7 突出した能力等を有する小中学生の大学や企業等での受け入れの拡充
- 8 突出した能力等のある高校生の大学等での受け入れの拡充
- 9 探究・STEAMの学びの成果発表の場の提供・対象年齢の特別枠の設定

また、このパッケージの位置づけとして以下のような目的が述べられています。

- ・本WGにおける議論は、全く異なる文脈で新しい改革が議論され、進行しているの

はなく、「一人ひとりの多様な幸せ(well-being)」を実現するという共通項を土台に、双方の目指すべきところを実現するために、次期学習指導要領改訂や来年度実施予定の教員勤務実態調査、「こども目線での行政の在り方の検討・実現」などの今後の動きも見据え、今後5年程度という時間軸のなかで子供たちの学習環境をどのように整えていくのか、各府省を超えて政府全体としてどのように政策を展開していくのか、そのロードマップの作成を目指すことが、本政策パッケージ策定の目的である。

加えて、「4. 政策の着実の実施に向けて」には重要な3つの指摘があるので以下にすべて掲載します。(下線ママ)

(教育に関わる人の多さ、影響の大きさ)

教育は、一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を実現する社会にとって大きな役割を担っている。また、1200万人の子供たちと100万人の教師が、1700ほどの自治体の35000校を越える小・中・高校等を舞台に向かい合って学びを重ね、保護者や地域の方々もその学びを支えるなど、教育には多くの人がかかわっている。他方、少子高齢社会のなかで、自分自身や自分の子供などが学校教育を終え、直接教育とはかわりがなくなっている人も増加している。

個人にとっても社会にとっても重要で、多くの人がかかわり、他方で学校に直接かわりのない人も少なくないなかで、教育についてはそれぞれの経験や思いに基づく様々な考え方や意見があるだろう。この政策パッケージの中間まとめに対して寄せられたご意見にも、様々な考え方が示されていた。そこに共通しているのは、次代を担う子供たちのために何が必要か、そして自分には何ができるのか、という視点であった。

(学びの転換に向けた国民との対話・認識共有、協働の必要性)

この政策パッケージで提言されている施策は、学習指導要領に定める「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」という、これからの学校に求められる理想像を実現するために、今後5年程度を見据えて、学校や子供たちの学びの環境をどう支えていくのかについて、政府が主体となって取り組む施策をまとめたものである。

これらの施策は、大人の頭のなかにあるかつて自分が受けてきた教育とは異なるため、それが一つ一つ実現されていくにつれ、不安や違和感が生じるかも知れない。このため、一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を実現する社会に向けて、学びの転換が不可欠であることを、政府としても国民としっかりと対話し、認識を共有し、協働することが求められている。

(実践・実証、アジャイルな政策形成)

教育政策については、その目的を明確にし、それを共有した上で、現状や政策の有効性・実効性を把握する方法などを関係府省や有識者、一人ひとりの国民の知恵を出し合って形作り、その状況を可視化するなかで施策の確実な実施と、その検証や深化を図ることが求められる。そのような観点から、今後、本政策パッケージの推進状況の把握や検証、さらなる深化について、総合科学技術・イノベーション会議において関係府省や有識者なども交えながら議論を重ねることとしたい。その際、本パッケージで目指す姿や施策を掲げて終わるのではなく、各施策をできるところから推進するとともに、府省を越えた協働のなかでイノベーションの観点からも実践、実証に取り組むことが必要である。デマンドサイド（子供目線）からのフィードバックを繰り返すことで、政策をアジャイルに組み立て、よりよいものに進化させていく新たな政策手法に取り組むことも含めて、総合科学技術・イノベーション会議において、専門的に議論し、施策を深化させていくことを志向したい。

Council  
for  
Science,  
Technology  
and  
Innovation

Society 5.0の実現に向けた  
教育・人材育成に関する政策パッケージ

● ● ●

2022年6月2日

総合科学技術・イノベーション会議  
Council for Science, Technology and Innovation

## I-6 特定分野に特異な才能のある児童生徒

特定分野に特異な才能を持つ児童生徒は、学問、芸術、スポーツなどの分野で卓越した能力を発揮する一方で、学校の教育環境や人間関係に適応しにくい場合があります。特に学習内容のミスマッチ、興味関心の偏り、同世代との関係性のズレなどが要因となり、不登校につながるケースが見られます。また、発達障害の特性を併せ持つ2Eの児童生徒は、才能を活かす機会と学習環境の適応において特に大きな課題を抱えています。本事業の支援対象となった特異な才能のある児童生徒は、学校の教育システムや人間関係に適応できず、不登校傾向にあるケースが多く見られています。その主な要因は、以下のとおりです。

### (1) 学習内容や授業スタイルのミスマッチ

- 学習進度が遅く感じる：興味のある分野では高度な知識を持つが、学校の授業が基礎的すぎて退屈を感じる。
- 特定分野に集中したい：幅広い教科を学ぶ学校教育より専門分野に特化した学びを求める傾向がある。
- 得意分野以外の学習が苦手：特定分野での才能と裏腹に他教科で著しい学習困難を抱えることがある。

### (2) 周囲との人間関係のズレ

- 同世代との関心の違い：同級生との興味関心が異なり会話がかみ合わないことから孤立しやすい。
- 才能ゆえの誤解：高度な知識や技術を持つことが「上から目線」と受け取られトラブルの原因となる。
- 協働学習の困難さ：自分のやり方にこだわりが強く、グループワークに適応しづらい。

### (3) 学校環境への不適応

- 学習方法の画一性：独自の発想で問題を解決しようとするが、学校のルールに合わないとして評価されにくい。
- 感覚過敏・過集中の影響：周囲の音や光に敏感で教室環境が苦痛を感じる、特定の作業に熱中しすぎて時間管理が難しいなどの困難がある。

これらの要因が複合的に作用することで、学校への適応が困難になり、不登校につながるケースが見られました。

特異な才能を持ちながら発達障害の特性を併せ持つ2Eの児童生徒は、才能を伸ばす機会と学習環境の調整の両面で支援が必要です。本事業では、こうした児童生徒に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を組み合わせることが有効であることが確認されまし

た。星槎グループでは発達の特性に応じた学習環境の場として「学びの多様化学校」をはじめとする取り組みを進めてきています。これは、

- 個別の興味関心や特性に応じた柔軟なカリキュラム
- 得意分野を活かせる専門的な学びの機会
- 社会との接続を意識した協働的な学びの場

を組み合わせることで、従来の学校システムでは対応しにくかった児童生徒の才能を最大限に引き出すものです。本事業に於いても、この枠組みを活かした支援が効果的であることが確認されました。



## Ⅱ 研究事業報告

### Ⅱ-1 研究概要

特定分野に特異な才能のある児童生徒の対応を専門とする学校外教育施設にて以下の取組を行い、学校外機関の在り方や、学習状況の把握や学習評価の在り方を探ります。その際、2E 児童生徒の対応にも留意して実践研究を進めます。

- ・ ICT を積極的に活用した個に応じた学習活動の日常化やサポートの在り方の可視化
- ・ プロジェクトベースラーニングや STEAM 教育を参考にした探究横断学習を教育課程の中心とした協働学習プログラムの構築
- ・ 年齢・発達・得意分野の多様な集団において有効な時間割・教育課程の検討
- ・ 家庭と情報を共有するための方法の検討
- ・ 個別指導計画モデルの作成と分析
- ・ 2E 傾向のある児童生徒への多様性の理解、心身の育成を目的とした SEL 教材の研究開発

## Ⅱ-2 現状の分析と取り組み内容

### (1) 現状の分析

SEISA アカデミーは、学校法人星槎の運営する学校外教育施設です。形式上初等部・中等部・高等部と区分していますが、児童生徒個々の状況に応じて早修や拡充をして授業に取り組むことができるようにしています。在籍するのは、小学4年生から、高校生年齢までの児童生徒で、小中高一貫教育無学年式となっています。初等部の児童はフリースクールの枠組みで受け入れています。中等部の生徒は本法人の設置する星槎中学校の在籍であるが形態としてはフリースクールです。高等部の生徒は、本法人の設置する星槎高等学校通信制課程に併せて在籍しています。

SEISA アカデミーにおける学習内容は、日本国憲法、教育基本法、学校教育法に定められた目的を達成するために、学習指導要領の各教科科目の目標を達成すべく構成されています。

開設初年度の2023年度は5名でスタートし、10月後期入学で1名を新たに迎え、6名の児童生徒が在籍しているなかでの実践研究でした。ほとんどの児童生徒が2E (twice-exceptional) で、不登校経験者でした。その6名が辞めたいと思うことなく1年間継続して登校できたことが第一の成果であったといえます。また、児童生徒個々の状況を把握し活動していくことが重要であることがなにより重要であることが明らかになりました。

2024年度は新たに10名の新入生を迎え、いわゆる学年構成人員は、小4生1名、小5生3名、小6生3名、中1生5名、中2生0名、中3生2名、高1生2名の合計16名、年齢は10歳から16歳となりました。新入学に際しては、事前の一定期間の体験入学など経て、学力試験、面接試験（受験生・保護者別、受験生課題発表プレゼンテーション含）で構成する入学試験により選抜しました。出願に際し提出してもらう書類ではWISCの検査結果や受験生に関するスキルアンケートもお願いしているが、IQ値やスキル、体験入学の行動観察から見て、特定分野に特異な才能のある児童生徒であると考えられ、かつ2E傾向があると確認しています。

### (2) 研究における取組

本取組は2E傾向のある児童生徒を含む、特定分野に特異な才能のある児童生徒を主対象としたSEISA アカデミーにおいて、どのような教育がこれら児童生徒に有効であるかを実証研究するものです。

AIドリルによる基礎学習や個に対応した早修、PBLをきっかけにした拡充、それらをどのように日常の時間割にコーディネートできるかということを実践に基づいて考察をしていきます。加えて、これらの学修とその成果を個別支援計画にどのように反映させることができるか。そして、それらを含め児童生徒の個別状況やSEISA アカデミーの活動をどのように家庭と連携していくことができるか、そのための方法などを検討します。

また、2E とと思われる児童生徒への自尊感情や他者認識を向上させるため SEL の取組を進めて、より学びの自律習慣の確立と、探究心への意欲向上が図れるか検討します。

### ①学校外機関の在り方に関する実証研究

A：年齢に応じた学習成果目標をどのように実現するか

数種類の AI ドリルを活用し、児童生徒のタイプに応じた活用方法について研究していく。

B：協働的な学びに関する実証研究

チーム単位でのプロジェクトベースドラニング(PBL)や STEAM 教育を参考にした探究型横断学習を教育課程の中心とし、学びへの好奇心、意欲や課題発見、解決を重視した協働学習プログラムがどのように構成できるか研究していく。

C：時間割構成上の取り組みの実証研究

個々の児童生徒の状況に最適化して有効な時間割はどのようなものであるか検討していく。年齢・発達・得意分野の多様な集団において有効な時間割や教育課程を検討していく。

D：家庭と情報を共有するための取り組みの実証研究

個別の児童生徒の状況を家庭と共有し、個別の配慮を進めていくことが何より重要だと考えている。この方法としても個別の支援計画への取組も検討していく。また、SEISA アカデミーとして個々への配慮だけに終始することなく共同体としての活動も重要だと考えるために、どのような学校通信が有効か検討していく。

### ②学習状況の把握や学習評価の在り方に関する実証研究

A：個別指導計画モデルの作成

学習成果や教育の成果を明らかにして支援に取り組むためにも ICT を積極的に活用して個に応じた学習活動の日常化やサポートの在り方の可視化や、どのような個別指導計画モデルが有効か検討していく。特に個別指導計画は星槎中学校・星槎高等学校にてシステム化され実用化されているものがあるが、SEISA アカデミーに在籍するタイプの児童生徒用には対応していないので改修して実用化することを目指す。

### ③2E 児童生徒の対応に関する実証研究

A：SEL(ソーシャル&エモショナルラーニング)教材に関する実証研究

令和6年度は、SELを提供する側である教職員やアカデミー関係者、保護者及びご家族とで SEL への気づきと必要性を同一線上で共通理解を行い、協働をはかれるよう、取り組める環境構築を行う。SEISA アカデミー環境下の実践を家庭と共有することで、家庭での実践へ繋げる。児童生徒の個やクラス場面での経験が家庭での実践とで繋がりを、そして見えることが出来ると、次は段階的に拡がりを持たせて多様な場面で汎用が可能となる。その上で SEL を育む風土や文化を日常化とする環境形成を行う。その

ためにも包括的 SEL アプローチをローカライズすることが肝要であり、SEISA アカデミーに携わるコミュニティに SEL 文化を計画的に拡げることへ繋がると考えている。以上のことに取り組めると、児童生徒の自尊感情や他者認識は、スムーズに、自然に伸ばすことが可能となり日常化される。そして、学業への取り組みが改善、自律習慣の確立と更なる探究心と学びへの意欲が向上することが見込まれる。この想定に関して実証研究を進める。

## Ⅱ-3 研究体制

研究体制は、以下に示す運営指導委員会のもと、SEISA アカデミー現場 STAFF（常勤 4 名、非常勤 11 名）の教育活動を対象に実証研究を行った。

### <運営指導委員会の構成>

	氏名	所属・役職等
1	蓮田 亮大	学校法人星槎 SEISA アカデミー担当理事
2	藺 隆太	学校法人星槎 星槎高等学校・指導主任
3	龍 拓馬	学校法人星槎 星槎中学校・教務主任
4	森下 佳苗	学校法人星槎 SEISA アカデミー・主任
5	松本 幸広	自閉症スペクトラム学会理事 星槎大学客員教授
6	中西 茂	元中央教育審議会委員 星槎大学客員教授
7	藤堂 栄子	NPO 法人 EDGE(エッジ)会長

## Ⅱ-4 児童生徒の実際

### 1. SEISA アカデミー生の知的能力について

SEISA アカデミーに通う児童生徒は高 IQ、好きなものに関しての好奇心が高い、学ぶことに対して意欲がある、この3つを選考において大切にしているので比較的学びに対しては前向きな児童生徒が集まっています。IQ 値においてはボーダーを設けているわけではありませんが、入学した児童生徒の数値を見てみると FSIQ が平均 124 と高 IQ であることが分かります。

在籍児童生徒 WISC 結果

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
[Redacted]																
不登校	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○

※不登校欄に○があるものは不登校だったことを示す

WISC の結果より高 IQ であることは明らかであり、特に言語理解が高い児童生徒が多いので視覚的な印象より論理的な言葉での説明で納得するケースが多くあります。言葉巧みではあるが ASD の診断を受けている児童生徒が 16 名中 11 名と多く、コミュニケーションにおいては苦戦しており、自分の意見をとにかく一方的に伝えて終わり、批判的な言葉が多く、相手がどういう気持ちになるかというその先をイメージする想像力が乏しい。自分の思ったことをアウトプットすることはできるが、みんなの意見を精査し、結論づけていく意見の「構築」に課題がありました。一方で、「質問力」はレベルが高く、外部から特別講師などをよんで講義してもらったり、校外学習で外に見学に行ったときなど講師の方に対して積極的に質問し、学年相応以上の内容を聞くことが多いので先方に感心されることも多々ありました。課題としていた「相手の話を聞いて(聴いて)、建設的な話し合いができるようになる」というのは普段から行動目標に掲げ、授業の中でも話の聞き方、意見の伝え方を練習し、1 年かけてだいぶ話し合いができる環境作りはできたと考えられます。時間を置かずにその場ですぐ指導する、の繰り返しで課題改善につながるということが明らかになりました。

## 2. SEISA アカデミー生の社会性について

WISC 結果より、全体的に「言語理解」と「知覚推理」の指標の両方、または一方の得点が高く「ワーキングメモリー」と「処理速度」は低いという傾向があります。これは 2E の可能性が高いと判断される基準にあると考えられます。2E 児とは「優れた才能」と「発達障害」などの「障害」を併せ持つ「二重に特別な支援ニーズのある子ども」を指しますが、SEISA アカデミーに通う児童生徒はその傾向が強く、「才能を伸ばす」前に才能を伸ばす障害となるものに対する支援からスタートしました。支援といってもそこに何か手立てを企てるというよりは、とにかく「時間をかけて待つ」ということに徹し、すぐには改善されないものとして数か月、年単位で対応してきました。

その一つに「あいさつ」があります。全員ではないが新しい場所、初めての人に対する警戒心からか声に出しての挨拶がなかなかできず、最初は目も合わせない、慣れてきて目が合うようになって、うなずくようになって、1年経ったところでようやく声に出しての挨拶ができるようになる事例もありました。同時に「ありがとう、ごめんなさい」の基本的な挨拶も行動目標にし、毎日の学校生活の中で意識できるようにしました。コミュニケーションも感情的で一方向的になりがちのため、相手に正しく自分の気持ちを伝えるために「人の話を聞こう(聴こう)」「言葉で伝えよう」、嫌なことがあった後も立ち直り、切り替えを早くできるように「レジリエンスを高める」、過集中になっても次の行動に切り替えられるように「メリハリをつけた行動」を心がけるなど、社会に出て必要な力を少しずつ意識できるようにアカデミーのチャレンジとして掲げています。これはよりよい学校生活を送れるように、社会に出ても必要な力を今から付けられるようにと子どもたちが話し合いで決めたチャレンジでもあります。

## Ⅱ-5-1 年間行事 2023

月	取組内容
4月	出発式 児童生徒オリエンテーション期間 保護者面談期間
5月	児童生徒、保護者面談を経て個々対応、登校スケジュールの見直し
6月	6月祭・ホテルの夕べ(星槎中学校) ブース準備(割りばし射的)、ブース接客対応 アカデミー説明会(後期入学者)
7月	SAAB(星槎の国際交流イベント)に向けての準備開始 AI ドリル導入(夏休みより週1 配信) 後期入学者体験入学(4日間) 第1回保護者会&保護者セミナー
8月	校外学習①(ドローン体験@星槎国際高尾キャンパス) 特別授業(出校日:液体窒素の実験)
9月	きら星アワード(夏休み課題発表会) AIドリル取り組みの表彰 アカデミーカフェ開店 アカデミー説明会①
10月	体育祭(星槎中学校合同) ハロウィン仮装大会 来年度入学希望者体験入学①(4日間) 第2回保護者会
11月	SAAB(星槎の国際交流イベント:ブース展示) アカデミー説明会②
12月	校外学習②みかん狩り(星槎中学校合同) 校外学習③うどん打ち体験(星槎国際立川学習センター) STEAM教育(みそ作り) LINK 演劇鑑賞(星槎高校) アカデミー説明会③ 来年度入学希望者体験入学②(4日間) 第3回保護者会
1月	学力検査(グレード確認テスト) アカデミー説明会④ 来年度入学希望者体験入学③(4日間) もちつき大会
2月	アカデミーR6 年度入学試験 第4回保護者会
3月	アカデミー1期生&2期生交流会 修了式

※毎月学校通信発行

特別授業 赤字 / 特別活動 青字

## Ⅱ-5-2 年間行事 2024

月	取組内容
4月	出発式 児童生徒オリエンテーション期間 保護者面談期間 登校スケジュール決定 AIドリル選定 健康診断 新入生歓迎会(星槎高校)
5月	2期生歓迎遠足 平常授業開始 AIドリル使用開始 個別探究開始 IEP 検討 特別授業実施(AI ロボット) 第1回保護者会
6月	IEP 活用開始 6月祭(星槎中・星槎高校) アカデミー説明会① レポート1次確認(星槎高校)
7月	キャンプ実習(星槎中学校合同) 第2回保護者会 体験入学4日間① 特別授業実施(マネー講座) 生徒面談(星槎高校) 保護者セミナー
8月	校外学習① 夏休み特別授業
9月	きら星アワード(課題研究発表会) 前期プレゼン大会 宿泊研修 前期学力検査 SAAB 準備(グループ探究) アカデミー説明会② レポート2次確認(星槎高校)
10月	体育祭準備期間・体育祭(星槎中-高合同) 体験入学4日間② 特別授業実施(ふれあい天文学) 第3回保護者会 特別授業実施(感覚共有プログラム)
11月	SAAB(国際交流イベント) ハロウィン仮装大会 アカデミー説明会③
12月	体験入学4日間③ 第4回保護者会 校外学習②みかん狩り(星槎中学校合同) 校外学習③ 生徒面談・保護者面談(星槎高校) 特別授業実施(勉強が苦手でも大丈夫)
1月	きら星アワード アカデミー説明会④ 体験入学4日間④ スキー実習(中1・中3/星槎中学校合同・星槎高校) 後期学力試験 特別授業実施(株式会社ユーミックス主催:つよみチェッカー)
2月	第5回保護者会 アカデミーR6 年度入学試験 個別探求発表会 後期プレゼン大会
3月	アカデミー1期生&2期生交流会 修了式

※毎月学校通信発行

特別授業 赤字 / 特別活動 青字

## Ⅱ-6 年齢に応じた学習成果目標の達成方法

### 1. プレゼン大会の実施

SEISA アカデミーではプロジェクトベースドラーニング(PBL)や STEAM 教育を参考にした探究型横断学習を教育課程の中心として学習活動をおこなっています。しかしながら前記の学習活動の実施にあたり、興味関心が多種多様な、特定分野に特異な才能のある児童生徒にとって、探究型横断学習の成果を画一的に定めることは当人の学びへの好奇心や意欲に蓋をしてしまう恐れがあります。そのため、個人の学習成果目標の達成確認方法として、在籍児童生徒全員参加の「プレゼン発表会」を年間2回(9月及び2月)実施し、学習成果をアウトプットする機会を設けました。

#### 【実施目的】

- ・学びへの好奇心を持続させ、得意な分野における探究心を育み年齢に応じた学習成果目標を達成する
- ・自信の考えや意見をアウトプットをすることによる成功体験の積み上げ
- ・探求型横断学習の学習評価方法と学習成果目標の紐づけのためのプログラム研究

#### 【実施方法】

- ・個人が興味関心を持っていることに関して探究する「マイプロジェクト」の時間に題材決定及び探究学習と発表資料づくりをおこなう
- ・スタッフはファシリテーターとして探究のためのサポートとアドバイスに徹する
- ・発表形態は個人の自由とし、当日は保護者並びに学校関係者も自由見学可とする

#### 【実施にあたっての留意事項】

- ・アウトプットすることへの苦手さに対する支援内容

SEISA アカデミーの児童生徒は様々な理由から自身の考えを他者へアウトプットすることに不安や苦手意識を抱えている児童生徒が多いため、自信を持って発表できるよう、アウトプットすることを専門的に学ぶ「アウトプットゼミ」の開講、発表方法の多様化、をおこないました。当日の発表の仕方は様々で、前に立ってのプレゼン、音声合成ソフトを使用したコンピュータ音声でのプレゼン、事前録画でのプレゼン、ビデオ会議システムを使用したりリモートでのプレゼン、等、本人のやりやすさを優先することで、ほとんどの児童生徒が探究内容のプレゼンを実施することができました。

- ・探究学習に対する支援内容

興味関心をもったことに対して探究しようとする姿勢は勢いがあり、その勢いが消える前に必要としている物を準備したり、必要な情報へアクセスする方法等を提示することを意識してファシリテートをおこないました。保護者の協力も得られ、実際に企業訪問をした内容をプレゼンする児童生徒もおり、即応と保護者連携の必要性を改めて感じました。

今年度実施したプレゼン発表会は児童生徒、保護者ともに一定の達成感と成果を得られた結果になったと考えます。内容に関しても専門的な知識について触れる内容となっ

ているため、今後はさらに探究することで、より深い学びへ繋げていきたいと考えています。

## 2. 学力検査の実施

SEISA アカデミーは探求型横断学習を教育課程の中心におきながら、学習指導要領の各教科科目の目標を達成すべく学習内容を構成しています。個々の児童生徒の興味関心が強い内容をきっかけに学習を進めていく形態のため児童生徒自身、生き生きと活動をしている様子が多く見られます。一方で、苦手意識をもっている分野や興味が沸かない分野の学習に関して学習姿勢に差があり、また学習成果が客観的にわかりづらいという課題点を踏まえ、2024年度は年2回(9月及び1月)に学力検査を実施しました。

### 【実施目的】

- ・児童生徒が学習到達度の確認と振り返りをおこなうことで、持続的な学習姿勢の定着を図る
- ・定期的に学力検査を実施し、児童生徒の学習意欲を促す
- ・児童生徒へ目指すべき学習目標を提示し、学びの自律習慣を育む

### 【実施内容】

- ・国語、数学(算数)、英語の3教科の観点を中心に据えた問題を作成し、取り組ませる
- ・評価は点数及び各年齢の学習目標到達度の指標としてグレード G1(小1)~G12(高3)で評価する

### 【実施にあたっての留意事項】

試験問題に関しては個々の取り組みやすさ(LD やディスレクシア)に対応できるように紙面での試験と Google フォームでの試験を選択できるように作成をおこない、登校ができない児童生徒も自宅から受検ができるようにしました。また、一般的な定期試験とは区別し、ネット環境が使える状態で学力検査を実施したため、知識を問う問題よりも、思考力や論理力、問題解決能力を意識することで、これからの社会に必要な生きる力と直結した学力が養えるよう配慮をしました。

### 【実施結果と総評】

いわゆる試験形式での取り組みとなるため、児童生徒から反発もあると予想していたが、大きな混乱もなく実施できました。1回目(9月)よりも2回目(2月)の方が慣れてきたこともあり、児童生徒が自律的に試験へ取り組む様子が見られ、継続することの手ごたえと効果を実感できたと言えます。結果に関してはほとんどの児童生徒が実年齢のグレードよりも高い到達度を示したが、興味関心の有無により、分野毎のばらつきも伺えました。

今回学力検査を実施し、目指すべき目標と指標(グレード)を意識させることで、児童生徒自身が目的意識をもって学習へ取り組むきっかけとなることを確認できました。今後、学力検査内容の精査や、試験内容と学習指導要領との客観的な紐づけをすることで、より年齢に応じた学習成果目標の達成方法として練り上げていきます。

## Ⅱ-7 教育課程の考え方 1 通常授業

### 1. 通常授業 2023

SEISA アカデミーは、学校法人星槎の運営する学校外教育施設です。形式上初等部・中等部・高等部と区分していますが、児童生徒個々の状況に応じて早修や拡充をして授業に取り組むことができるようにしています。在籍するのは、小学4年生から、高校生年齢までの児童生徒で、小中高一貫教育無学年式となっています。初等部の児童はフリースクールの枠組みで受け入れています。中等部の生徒は本法人の設置する星槎中学校の在籍であるが形態としてはフリースクールです。高等部の生徒は、本法人の設置する星槎高等学校通信制課程に併せて在籍しています。

SEISA アカデミーにおける学習内容は、日本国憲法、教育基本法、学校教育法に定められた目的を達成するために、学習指導要領の各教科科目の目標を達成すべく構成されています。午前はベーシック(基礎学習)を中心とし、ICTを積極的に活用した個に応じた学習活動の日常化やサポートを実施します。午後はプロジェクトベースドラニングやSTEAM教育を参考にした科目横断型探究学習を教育課程の中心とした協働学習プログラムの構築を図りました。

年齢・発達・得意分野の多様な集団において有効な時間割・教育課程の検討を常に考えながら時間割の構築を実践してきました。

#### 2023年スタート当時の時間割

	月	火	水	木	金
9:00～9:15	集いの時間				
9:15～9:30	対話の時間				
1限 9:30～10:20	国語表現	ART	基礎学習	基礎学習	英語②
2限 10:30～11:20	基礎学習		レクリエーション	基礎学習	SEL
3限 11:30～12:20	英語①	星槎の時間		コンピュータ基礎	数学探求
12:20～13:00	昼休み(シエスタ)				
4限 13:00～13:50	プロジェクト (探求)	STEAM'S	自主学習	アドベンチャー	プロジェクト (探求)
5限 14:00～14:50					
14:50～15:05	掃除				
15:05～15:15	ミーティング				

## 2. 通常授業 2024

初年度は6名の児童生徒からスタートしたこともあり、欠席が多いとなかなか授業にならないという日もありました。基礎学力をつけることより、自分の学びたい、やりたいことを SEISA アカデミーで実現したいという児童生徒の気持ちが強かったのでまず何をやりたいか、もう一度子どもたちの声を精査した上で、時間割の再構築をはかりました。6名中4名が不登校経験者であり登校も安定していなかったことから年度途中でオンライン授業も導入しました。探求の時間も児童生徒任せにするのではなくスタッフが子どもたちのやる気を引き出し、形にするところまでの伴奏が必要なことも分かりました。この結果、抽象的な時間割よりももっと具体性を持たせた方が子どもたちにとって動きやすいことが分かったことから、初年度の経験を活かし、2年目はもう少しバラエティーに富んだ内容で、その時間に何を学ぶのか分かりやすい具体性のある時間割にアップデートしました。時間割は以下の通りです。

### 2024年度時間割(前期)

教室	月 Labo①	月 Labo②	火 Labo①	火 Labo②	水 Labo①	水 Labo②	木 Labo①	木 Labo②	金 Labo①	金 Labo②
9:15	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR
	〈午前の活動〉		〈午前の活動〉		〈午前の活動〉		〈午前の活動〉		〈午前の活動〉	
9:30 10:20	日本語理解と表現		基礎学習	畑&カフェ プロジェクト/ ハンズク ラブ	基礎学習	基礎学習	基礎学習	畑&カフェ プロジェクト/ ハンズク ラブ	English Conversation- (basic)	学び合い タイム
10:30 11:20	数学 探 究 (BA)	基礎学習	学びあい タイム		【1Day Teacher】 STEAMS 科学/調理/音楽/経済 場合によっては ★全校集会★		(SEL 個別面談) レクリエーション		学び合い タイム	English Conversation (advance)
11:30 12:20	基礎学習	数学 探 究 (AD)	ART	Music					1週間の学習振り返り &学びの地図作成	
12:20 13:00	ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム			ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム
	〈午後の活動〉		〈午後の活動〉				〈午後の活動〉		〈午後の活動〉	
13:00 13:50	【ゼミ】 宇宙	【ゼミ】 イラスト	【ゼミ】 哲学	【ゼミ】 理科			【ゼミ】 心理学	パソコン 活動	lab③ マイプロ ジェクト	【ゼミ】 アウトプット
	lab③ マイプロジ エクト		lab③ マイプロジ エクト				lab③ マイプロジ エクト	英会話 【個人】 リチャード (スタッフル ーム)		
14:00 14:50	【ゼミ】 笑える数学	lab③ マイプロジ エクト	【ゼミ】 哲学	【ゼミ】 パソコンデ ザイン			【ゼミ】 心理学	パソコン 活動	lab③ マイプロ ジェクト	【ゼミ】 アウトプット
			lab③ マイプロジ エクト				lab③ マイプロジ エクト	英会話 【個人】	図書館へ 行こう	

## 2024年度時間割(後期)

教室	月 Labo①	月 Labo②	火 Labo①	火 Labo②	水 Labo①	水 Labo②	木 Labo①	木 Labo②	金 Labo①	金 Labo②
9:15	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR	HR
	〈午前の活動〉		〈午前の活動〉		〈午前の活動〉		〈午前の活動〉		〈午前の活動〉	
9:30 10:20	日本語理解と表現	基礎学習	基礎学習	畑 カフェ	基礎学習	基礎学習	基礎学習	畑 カフェ	English Conversation (basic)	基礎学習
10:30 11:20	数学探究 (BA)	基礎学習	歴史	基礎 学習	●【1Day Teacher】 STEAMS 科学/調理/音楽/経済など		(SEL 石田さん個別面談) レクリエーション		English Conversation (advance)	基礎学習
11:30 12:20	数学探究 (AD)	基礎学習	アカデミー ジャポン	Music	●【図書館へ行こう】 希望制による				1週間の振り返り	
	●【月1回の小実先生授業】 選択する・選択しない ※選択しない生徒はマイブ ロジェクトになります。									
12:20 13:00	ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム			ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム	ランチ タイム
	〈午後の活動〉		〈午後の活動〉				〈午後の活動〉		〈午後の活動〉	
13:00 13:50	【ゼミ】 宇宙	マイプロ ジェクト	【ゼミ】 宗教学	【ゼミ】 理科実験			【ゼミ】 日本文学	パソコン 活動	【ゼミ】 アウトプット	マイプロ ジェクト
	〈午後の活動〉		〈午後の活動〉				〈午後の活動〉		〈午後の活動〉	
13:00 13:50	【ゼミ】 宇宙	マイプロ ジェクト	【ゼミ】 宗教学	【ゼミ】 理科実験			【ゼミ】 日本文学	パソコン 活動	【ゼミ】 アウトプット	マイプロ ジェクト
14:00 14:50	【ゼミ】 笑える数学	マイプロ ジェクト	【ゼミ】 宗教学	【ゼミ】 ゆっ り、 算数 数学			【ゼミ】 日本文学	パソコン 活動	【ゼミ】 アウトプット	マイプロ ジェクト
			【オンラインゼミ】 ★なかしーDTM★ 13:00-13:50 月2回 隔週火曜日		【オンラインゼミ】 ★なかしーDTM★ 13:00-13:50 月2回 隔週水曜日		【オンラインゼミ】 ★だーしまイラスト★ 13:00-14:50 毎週木曜日			

2024年度の前期と後期でアップデートしたところは、前期の「哲学」「心理学」を「日本文学」「宗教学」としたところ、またオンラインの授業で「DTM(Desk Top Music)」と「イラスト」を追加しました。特にDTMはオンラインと対面の両方に強化したところ、この授業を選択している生徒の学びが深まると同時に、結束力も高まり、起立性調節障害で安定した登校が難しかった生徒が午前中から来れるようになり、学校での滞在時間が増加したことがありました。これはここ1年の自身の成長として生徒自身も実感しています。また、DTMから派生し、イラストもやってみようかなどやる気を見せ、木曜日のイラストゼミも後期の途中で選択するようになりました。少しずつではあるが探求の幅の広がりを見せています。

## Ⅱ-8 教育課程の考え方 2 特別授業

生徒それぞれの興味の対象にできるだけ合わせていきたいという面から、特別授業を企画しています。校外学習の行先については事前に話し合いを持っています。

### 1. TEPIA 先端技術館・明治神宮

日本で地球環境問題やイノベーションに配慮した最先端技術を情報発信している TEPIA 先端技術館での学習でした。3D プリンタやレーザー加工機の実物見学やプログラミング実演など生徒達に限らず我々スタッフに対しても満足度が非常に高い内容でした。加えて、もう一つの行程として明治神宮の参拝をおこないました。こちらは、普段 PC やスマホ、室内中心の活動と打って変わり厳かな雰囲気の中、開放的な空気に触れ充実した時間となったようでした。

### 2. 猿島ツアー

東京湾に浮かぶ無人島（猿島）の国史跡散策を計画したのだが、強風によりフェリーが欠航し、予定の変更を余儀なくされました。三笠公園にて戦艦三笠内の見学と軍港ツアーに参加することが出来ました。アメリカ海軍の原子力空母ジョージ・ワシントンが入港しており見ることができました。雄大なものや本物に触れ、歴史や国際関係について身近に感じるという体験こそが校外学習の一つの意義であると感じていたようでした。時間的にも移動距離的にもアカデミー生の体力・気力で十分に学習し、楽しめた校外学習でした。天候に左右される内容で、港であるため強風にさらされる1日となりましたが、それも体験の一環であったと思います。

### 3. 東京科学大学地球生命研究所 ELSI

地球と生命の起源に迫る、をテーマに星槎高校通信制にて高校生と事前学習をおこなったの参加でした。その講義から積極的に生徒たちは臨んでおり、実際に東京科学大学地球生命研究所に伺った際にも高校生たちと研修等で行動をともにすることができました。まず、高校生と触れ合うことが大きな学びになっているようであったと共に、アカデミー生の違った側面を見ることができました。

学食で昼食を取らせていただき、中にはそこにいた大学生に話しかけ大学生活について質問を投げかけている生徒もおり積極的な場面もみられました。研究所（ELSI）の見学では実際の研究室を外からではあるが見ることができ、建物全体の雰囲気からも本物に触れた感覚になっている生徒は多かったのではないかと感じました。最終的には時間がおしてしまうくらい質問も出て実りある校外学習になったと思います。

今後の校外学習では、事前学習をおこなったうえで見学や体験に臨ませ、内容によっては事後の学習にも取り組ませていくことが効果的ではないか、と考えています。実施回数は限られますが校外学習による体験の機会が必要だと考えています。

#### 4. アカデミーカフェ

2023年9月22日にアカデミーカフェをスタート。きっかけは、人数が少なく授業ができなかった時期にたまたまスタッフが持っていたコーヒー豆を挽く手動の豆挽きに強い興味を持った児童がいて、1日でかなりの量を挽いていたので学校職員にコーヒーを提供しよう、という動きから始まりました。最初は無料で提供したところ1日で30杯程度の需要があったので1杯150円で挽きたてのコーヒーが飲めるアカデミーカフェをオープンしました。アカデミーの児童生徒が「いらっしゃいませ」の接客からコーヒーの提供、お金をもらい、スタンプカードを押し、サービスのお菓子を勧める一連の流れを覚え、子どもたちだけで運営するスタイルができ上がりました。せっかくなのでSEISA アカデミーにあったらいいものを買おうということで冷蔵庫を買う目標を立て、半年で4万円の売り上げを達成し、念願の冷蔵庫を買うことができました。2024年度も継続してやっているが、今年度はアカデミー生の人数も増え、みんなが授業に参加する環境が整ったので昨年度に比べるとカフェをオープンする機会が減る一方、冷蔵庫がきたので夏はかき氷のイベントをやろう、ということでかき氷販売も実現させました。2年連続でハロウィンのコスプレイベントも実施し、カフェに足を運んでくれた職員にワンポイントコスプレをしてもらい、記念写真撮影のサービスも提供しました。カフェという憩いの場ができたことにより、同じ校地に同居している中学校の先生方もSEISA アカデミーに足を運んでくれるようになり、子どもたちが様々な大人と関わる機会が増えました。常連の先生には自ら声をかけて「今日もカフェ、オープンしていますよ」と呼び込みにも行くようになりました。SEISA アカデミーの体験入学に参加する児童生徒たちもカフェの体験が楽しかった、とアカデミーの人気事業になりつつあります。通常授業も拡大していき不定期開催になってしまうのが惜しいところですが、今後もしたらもっとお客さんが来てくれるか、売り上げが上がるか、安定した経営ができるか、などなど「子どもたちが運営するカフェ」として継続し、小さな社会経験につながるようにしていきたいです。

#### 5. 畑プロジェクト

授業の一環として週2回畑プロジェクトの時間を取り、放置され“草やぶ”になった畑を開墾し健康的な野菜をつくる活動をしています。このプロジェクトはその土地と周りの命のつながりを学ぶ環境教育の場となっており、種をまき、水をやり、太陽の光を浴びて、生命が育つ過程を通して、子どもたちに生命の尊さとプロセスの重要性を認識させています。野菜を育てるために、土や水に触れ、風を感じながら自然との関わりを持つことで五感が刺激されるだけでなく、スーパーに置いてある野菜も、土の中で栄養をもらって成長し育ったものなのだと理解を深め、食に対する興味・関心を持たせることができている。また作物を育てることで子どもたちは「ゼロから何かを自分たちで生み出す」ことを経験することができ、作物を育てる喜びも感じさせることができました。育てながら、なぜ肥料が必要なのか、虫が植物にどのような

影響を与えるのかなど、自然のサイクルやエコシステムについても学ぶ機会となっており、子どもたちが実際に手間をかけて育てた野菜は、調理実習の食材として利用しています。

また、畑プロジェクトとして、みんなで「育てる」ことで責任感を持ち、協力し合うことを学ぶ時間ともなっています。都市部に住んでいると、自然に触れる機会が少ないが、畑プロジェクトの中では、土に触れ、植物や昆虫の生態を直接観察することができます。こうした体験は、子どもたちにとって貴重な学びであり、感性を育む大切な機会となっていると考えています。また、自然のサイクルを理解し、植物の生命について学ぶことは、心の成長にもつながっています。

## 6. 三菱総研 DCS によるロボット PGM 入門

子どもたちの好奇心を引き出す、学びの充実をはかるために外部の出張授業も利用してきました。実績としては以下の通りです。

2024年5月21日(火)

10:30~11:20 (2限目) 小学生7名

11:30~12:20 (3限目) 中学・高校生9名

基本的なプログラミングの仕組みを学び、スクラッチの方法で動作の順序を考えプログラムし、ロボットを動かします。スクラッチにはなじみがあったので戸惑うことなくすらすらと作業についていくことができたようです。自分が組んだプログラム通りにロボットが動く様子を見て満足しているようでした。



## 7. マネー講座

① 2024年7月19日(金)

10:30~12:00(90分)※10分休憩あり

テーマ：「お金の基本を知ろう」

内容：お金の役割、お金を稼ぐ、お金の使い方、貯蓄について

生活に基づいた身近なところからお金について学び人生設計を考える

② 2024年7月22日(月)

マネー講座②

10:30~12:00(90分)※10分休憩あり

テーマ：「お金の育て方を知ろう」

内容：投資、株、NISA などお金の働きを通して社会を知る資産形成について考える

夏休みに入るタイミングで、子供にお金のことについて知識を付けさせたいという保護者の要望もあり、スタッフの知り合いで長年金融機関に勤務され(現在も現役のため詳細は割愛)、学校で講義経験のある方を招き特別授業を実施しました。保護者も一緒に参加。お金って何?の基本的な所から、将来増やしていくための手段、方法など2回にわたり幅広く学習しました。難しい内容でもあったが、「まずはおこづかい帳をつけることから始めてみようかな」など自分たちのできることからやってみようという行動につながりました。

## 8. マッケンジー・ソープ氏の感覚共有プログラム

2024年10月9日(水) 10:30~12:00

画家のマッケンジー・ソープ氏をゲストに招き、江夏画廊の江夏さんプロデュース「感覚共有プログラム」を実施しました。ソープさんの絵を2枚先入観無しで子どもたちに見てもらい感じたことをそのまま発言して共有していきます。一つの絵を見てもそれぞれ見方、感じ方が異なり、子どもたちの豊かで深い感性を知ることができました。最後にソープさんからどのような気持ちを含めてその絵を描いたのか答え合わせをして共通点や相違点を知ることで新たな発見につながりました。子どもたちは90分、楽しみながらも集中して取り組むことができました。



## 9. 国立天文台によるふれあい天文学

2024年10月16日(水)

前半 10:30~11:10/休憩 11:10~11:20/後半 11:20~12:00



授業テーマは「どこまで分かったのか?宇宙と生命の起源 第2の地球はあるのか?」について。週1回、月曜日に宇宙の授業を選択している生徒もいるため、持っている知識の再確認をしながら、聞いているようでした。また、講義を受けて新たに湧いた疑問

を解決しようと質問タイムには時間いっぱい使い切るほどに質問が出ました。

生徒①：なぜ「すばる望遠鏡」はハワイにつくられたのか？

生徒②：地球以外の星は磁場があるのか？など。

他にも2つほど質問がでましたが、今まで行った学校の中で一番質問のレベルが高いと講師の先生からほめられました。

## 10. 藤堂高直氏とトークセッション

12月23日(月)10:30~12:00

テーマ「勉強が苦手でも大丈夫！」

- ディスレクシアって知ってる？
- 小・中・高、それぞれのステージの話
- 海外生活時代
- 現在について
- 国内外で活躍するディスレクシアの紹介

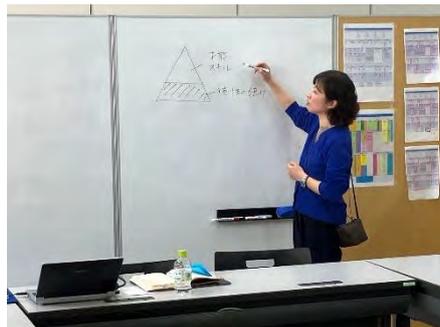


タイで建築家として活躍する藤堂尚直氏をお招きし、子どもたちとトークセッションを実施しました。子どもたちも藤堂氏の幼少期の話を聞きながら共感できる部分があったようでうなずいたり、話の途中でも発言したりすごく反応が良いものでした。一方的な講義ではなくトークセッションとしていたので子どもたちにも自由に質問してもらい生きるヒントをたくさん得ることができました。「自分らしく生きること」は誰にでもできると勇気をもらいました。

## 11. 株式会社ユーミックス主催：つよみチェッカー

1月31日(木)

10:30~11:20 小学生 / 11:30~12:20 中学生・高校生



株式会社ユーミックスによる「強みチェッカー」を活用した特別授業を本校にて実施。生徒自身も気付いていない自身の【潜在的な強み】を、事前アンケートと講義、及び事後アンケートで知ることにより今後の学校生活やそこで直面していく人間関係に活かしていくことを目的として実施しました。当日の講義では参加した生徒（特に中学生）が予想以上に積極的だったことが印象深かった内容でした。自分が思う自身の強みと同時に他者が考える当人の強み、というディスカッションは大いに盛り上がっていました。

思春期特有の様子なのか、他者に自分はどう見られているか？という切り口の意見や評価に対しては興味があったようでした。

実施時期に関しては年度が明け進級し人間関係に変化があったときに行うことが効果的だと考えます。

## 12. マイクロビットを使ったプログラミング授業

月1回のペースで、50分授業×2コマ100分間でおこなうマイクロビットを使った特別授業です。スクラッチを使いプログラミングをおこない、思った通りに工作物を動かしたり、探索用のプログラミングを施し、校舎内での宝探しに応用したり、参加生徒たちにとって興味深い内容で進められました。保護者で授業見学を毎回希望される方もいるなど、大人でも十分に興味を引く内容になっていました。実際、基本的なプログラミングはほとんどの生徒が習慣的に触れており経験していますし、講義内容もそれに合っているからこそ活気のある時間になっていたようです。

内容的にも時代の流れにマッチしている内容でした。

## 13. 調理実習

(魚の三枚おろし)

生徒からの希望により、鯖の三枚おろし体験を実施しました。当日の早朝に市場へ魚を仕入れに行きました。

包丁の使用には非常に気を配ることになりましたが実際には生徒たちが包丁に対して慎重な姿勢だったことが印象的でした。魚が三枚になった後はシンプルにフライパンでの塩焼きをおこない実食しました。総じてどのグループも味付けが塩辛くなっていたようですが命をいただくことの大切さも実感していたようでした。

(オムライス)

普段から食べ慣れている料理のオムライスが、生徒達からの希望で調理実習の品目となりました。食べられる量のご飯は各自持参、チキンライスを作ることから始まりました。玉葱や人参などのみじん切りも調理工程のうちで手際の良さが必要でした。メインの卵を焼く作業は、皆それぞれのイメージがあったらしく半熟にしたり、ケチャップで思い思いの字や絵を描いたり楽しんでいました。スタッフが買ってきていた焼きそばを具にした創作料理をつくったケースもありました。

調理実習の特別授業を重ねるごとに徐々に後片付けも意識させるようにしていました。調理実習は片付けまでが完了であることも指導しました。その結果、実際に食材を廃棄することを経験することで、フードロスの課題に対する意識の向上にもつながりました。

## Ⅱ-9 教育課程の考え方 3 特別活動

### 1. SAAB

2015年から始まったSAAB (SEISA Africa Asia Bridge) とは、星槎グループ創設者である宮澤保夫名誉会長の「これからの子どもたちの未来のために、アフリカとアジアに“橋=Bridge”をかけなければならない」という思いから誕生したプログラムです。2024年度は横浜市国際局と共催となり、2025 大阪・関西万博を契機とした地方公共団体による地域活性化に資するアフリカ地域との国際交流調査事業・外務省

「TICAD9」パートナー事業に認定されての開催となりました。またアフリカ・アジアの国々を対象に、協力いただいた大使館が18カ国、日本、UNOSAA (国連アフリカ担当事務総長特別顧問室)、UNDP (国連開発計画)、アイルランドにあるゴリーコミュニティスクールの校長・生徒を合わせると37カ国以上、総参加人数8,633名の参加となりました。

SAABは、子どもたちがアフリカの国々について「知る」「繋がる」という目標の実現を目指し、多くの国の方々と共に、アフリカのもつ多様性の素晴らしさ、可能性について語り合い、共感し合うイベントですが、SEISA アカデミーとして初参加の2023年は児童生徒6名、登校ペースもバラバラだったということもありみんなで何か1つのものを作りあげる、というよりは得意分野を生かし、分担作業で1つにまとめる、という形にしました。テーマは「エジプトの世界遺産、アブシンベル神殿」。ある生徒はパソコンでアブシンベル神殿の外側から中の様子までを忠実に再現し、音楽をつけました。他の児童生徒はアブシンベル神殿のジオラマを作成したり、アブシンベル神殿の画像を分割して巨大ポスターをつくったり、アブシンベル神殿の歴史を英語で読み上げ録音し、映像と共に流したものもありました。アブシンベル神殿に興味がない生徒は「砂漠」をテーマに絵を描き、詩をつけました。それぞれの得意分野を生かした分担作業でしたが初めての試みにしては上手くまとめることができました。2024年度の参加は2回目ということもあり、人数も多かったので「アフリカ・アジア」という大きなテーマの中で自分が探求したいことを自由にまとめ掲示する形にしました。中3の女子生徒2名は「東洋医学」を調べたいということで、同じテーマの中で一人は陰陽五行、1人はASDに対する漢方の効用、についてそれぞれ調べ学習しました。中1は2グループに分かれ、日本の織物の歴史とリベリアの国歌をDTMで再現する展示をしました。小学生は各自、アフリカの危険生物、アフリカのフルーツやアフリカの軍事力について調べたことを模造紙にまとめました。マイクラの建築でチュニジアのドゥツガ遺跡を再現した子もいました。高1の生徒は星槎高校のLINKという期間限定の劇団にオーディションを受け役をもらい、SAAB当日に好演、ベストアクター賞を受賞しました。また、SAABのオープニングセレモニーにSEISAアカデミーの生徒1名が代表で選出され、一大任務を成し遂げました。それぞれの形ではあるが適材適所、自分の好奇心の向くまま、掘り下げたい内容を調べ学習し(インプット)、表現(アウトプット)する一連の流れを体現することが

できました。来年は展示のみではなく STED という星槎が実施する TED「プレゼンテーション」に参戦できるようにしたい。

<SAAB 2023>



SEISA アカデミーでは、エジプトの世界遺産でもあるアブシンベル神殿をテーマに CG による再現、ジオラマの作成、巨大ポスター作製、動画による英語アナウンスによる紹介、イラスト作成に取り組んで発表しました。

<SAAB 2024>



2024 年にはアカデミー生も増えたことを受け、統一テーマではなくグループごとに研究テーマを絞って発表を行いました。具体的には、マインクラフトによるドゥツガ遺跡の復元、東洋医学に関する研究発表、DTM による国歌演奏、エジプトの軍事力考察、サバンナの動物・昆虫研究、アジア中東の繊維研究、アフリカ大陸のフルーツ研究など多岐にわたる発表を行いました。

アカデミーからは代表が、全体プログラムである、生徒・各国大使館・横浜市が参加するサミットに臨み、堂々とした態度で宣言の採択に発言し参加しました。

#### SEISA Africa Asia Bridge 2024 STUDENT SUMMIT Declaration Statement Declaration Statement 1

We focus on the SDGs goals of “End Poverty” and “Zero Hunger” and are working to solve hunger problems in impoverished areas in Africa and Asia by making effective use of discarded food and goods.

We aim to reduce poverty and hunger by practicing food aid and fund-raising activities through food loss reduction and food banks together with our fellow SEISA members.

#### **Declaration Statement 2**

We hope to deepen mutual understanding between African and Asian countries by knowing and connecting with each other about their traditions, cultures, religions, languages, and environments, and as a young generation, we would like to lead the world through active exchanges with each other.

We will continue to hold SAAB and practice and continue SEISA's philosophy of "Understand each other", "Leave nobody out" and "Make friends" so that we can flourish in creating a society that accepts diverse values and is free from prejudice and discrimination.

#### **Declaration Statement 3**

We will disseminate our proposals from time to time based on our knowledge of African and Asian countries we have studied over the past 10 years and our efforts to achieve the SDGs, from the students' perspective and viewpoints.

At TICAD 9 to be held in Yokohama in 2025, we will endeavor to contribute to society by making use of what we have learned at SEISA.

## 2. 夏のキャンプ

SEISA アカデミー設立後初めての宿泊行事となり、チームワークの向上やコミュニケーション能力の向上といった教育効果を確認できました。この宿泊行事では、仲間と協力して活動を行うことが多かったため、チームワークや協力の重要性を学びました。同年齢の友人や異なる年齢の人々との交流が、普段のSEISA アカデミーの教室では見ることができない子どもたちの成長をもたらしたと考えられます。集団行動の中で、自分の持ち物や時間を管理する必要性を感じ、自己管理や責任感を養う経験となりました。宿泊行事のプログラムは、ネイチャーウォークラリー、藍染め体験、バームクーヘン作りなど多彩であったため、視野が広がっただけでなく新しい知識やスキルを身につけることができました。それに加え、宿泊する場所の文化や環境について学ぶことで、社会や自然への理解を深めることができました。このようなプログラムを通して宿泊行事は、個人としての成長や社会性を育む貴重な機会となりました。望ましい人間関係の形成や集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画する積極性、自主的に協力して問題解決する力、健全な生活態度を育てることに宿泊行事は大変有効だったと考えています。

## 3. 体育祭

星槎中学生とともに星槎高校のグラウンドにて体育祭に参加。幸いにも参加者が前向きに取り組める種目のみ参加可能となった。それ以外の生徒は各種目・演目をiPadを用い撮影することを目的に参加しました。撮影した画像は動画作成に利用するため、本人たちも責任感をもって臨んでくれました。午後になり集中力が続かない小学生を中心に帰宅者が出始めたが、概ね体育祭の大きな醍醐味である高揚感や皆で作り上げた達成感などは感じていた様子でした。来年度は事前に参加する種目をはっきりさせ、準備で

きるとさらに一体感も増していくと思います。今後も、全校生徒が集まるような大きな行事に様々な形で参加ができるとそれもまた学びの一つにつながるのではないかと考えています。

#### 4. スキー合宿

高校生を除き、全員スキーが初めてという状況で臨んだ 2 泊 3 日のスキー合宿でした。宿泊自体に大きなハードルがある生徒もいる中、様々なことを想定し準備をして臨んだが、全体を通して大きな問題もなく全員に大きな成長がみられました。

2 日目で投げ出そうとする生徒が 2 名いたが、両名とも「やるよ！」の方向に傾き、小集団全体が前向きな方向に向かっていくことができました。普段はあまりこういう機会がないため、本当に自分の限界近くまで、または問題を自分の体を使って乗り越える経験ができたことは彼らにとってはとても大きかったと思います。次回以降も参加がしたいと全員が発言しており、彼らの経験の一端になったことは大きな意義がありました。本人たちの興味を満たし探究する部分も大切だが、新しい経験や刺激も与えていくとどこかでチャレンジするきっかけを掴んでくれるのではないかと強く感じました。

## Ⅱ-10-1 協働的学びの実証結果 1

### 協働的学びの実証結果 1

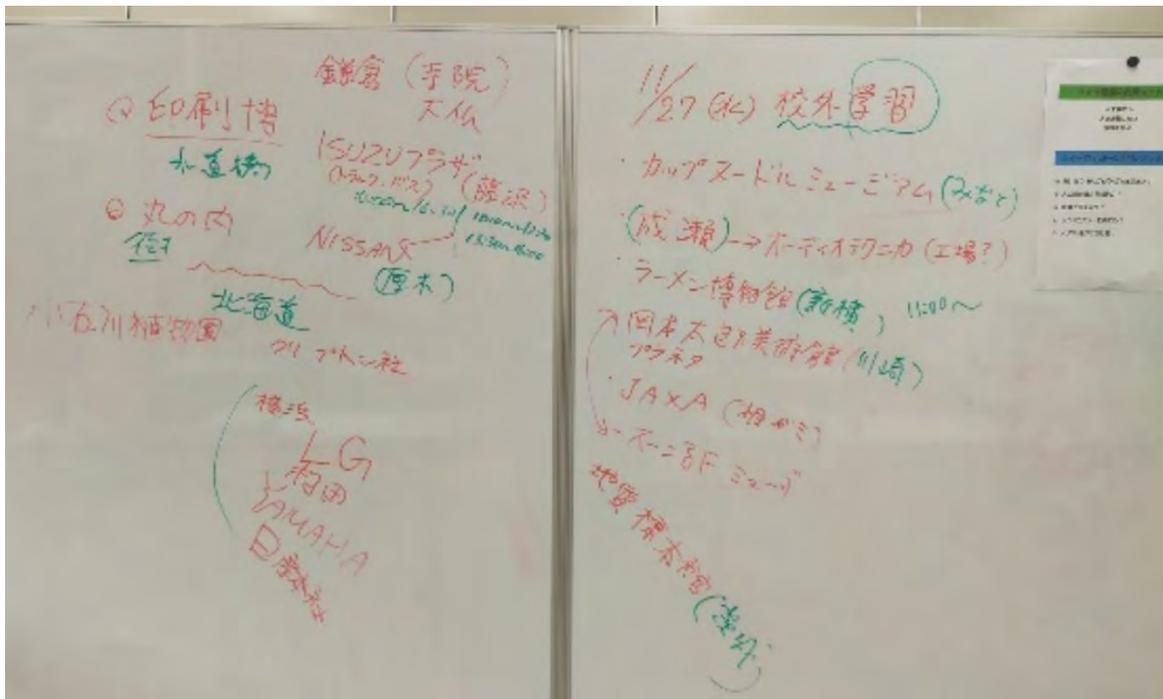
一人ひとりに対応する個別最適な学びは ICT を活用した日々の基礎学習や個別の探究学習を通して確立されてきたが、協働的な学びが自然発生するような環境作りはまだまだこれからだと考えています。その中でもこの2年間で協働的な学びを意識して取り組んできたことの1つとして「話し合いができる」雰囲気作りをすることが挙げられます。SEISA アカデミー生の特長として言語理解が高い。これは2Eの特性とは必ずしも言えないが、言葉に対して敏感で、会話の中でも正しい言葉を用いていないと違和感を感じて会話を中断したり、持論を展開し、論破しようとするなど能力の高さゆえに物事がスムーズに進まないときがありました。また、自分の持っている知識、思っていることを伝えたい気持ちが先行し、話の流れや間合い、周りの雰囲気を考えずに一方的に発言することが多々あります。このようなことから SEISA アカデミーでは何かを決めるために話し合いの場を設けても話し合いにならず、一方的な意見の飛ばしあいになってしまいまとまらない状況を何度か繰り返してきました。これはどうにかして建設的な話し合いができるように雰囲気を変えなければと思いこの1年間話し合いをする練習を積み重ねてきました。

### 話し合いの練習〈校外学習編〉

まず、話し合いをしたのは校外学習の行先。SEISA アカデミーでは校外学習の行先をスタッフではなく子どもたちに決めてもらう流れとなっています。①自分たちで学びたい場所を決めて予定を立てて行く。②初回の話し合いの進行はスタッフで行う、③少数派の意見がないがしろにされるような多数決で決めるのは禁止、というシンプルな注意だけ行い、9月の行先を決める話し合いをスタートさせました。話し合い1回目は行きたいところをひとりひとり出していく作業。場所の制限や費用のことなどは抜きにして、まずは全員が意見を出す練習。こういった内容は特定の積極的な児童生徒の意見に偏りがちなので、そうならないように1人ひとつは行先を出す空気をつくるようにしました。たくさんの意見が出たところで1回目は終了。当然1回の話し合いでは決まらないだろうと予想していたので、2回目の予定を立てました。2回目はたくさんの行先から絞り込んでいく作業。他県や費用的に現実的ではないところを省いていき、日帰りで SEISA アカデミーの生徒数で計3回、粘り強く話し合いをし、行先を2カ所まで絞りました。最終的にはひとつにまとまらなかったため校外学習の日程を2日間にし、行きたい方に行くというプランで落ち着きました。静岡県のタミヤ本社の中にある歴史館と江の島(さらに新江ノ島水族館コースと江の島散策コースに分かれる)に分かれ、2日間校外学習を実行。結果、見たいもの、学びたいことを十分に楽しみ、終始笑顔が絶えることなく、とても満足のいく校外学習となりました。次の

11月の校外学習も話し合いからスタート。前回の話し合いからだいが要領を得たのか、今回は2回目の話し合いで行先が決まりました。とはいえ、11月も2カ所になったのですが、趣味的思考が強かった前回の行先に比べると今回は科学技術の最先端を学ぶ TEPIA 先端技術館と歴史を学ぶ猿島になり、校外学習=学びという概念が備わったことに子どもたちの成長を感じました。猿島は当日フェリーが欠航となり、急遽横須賀軍港ツアーに変更となったが、戦艦「三笠」の見学に時間を充てることができ、日露戦争についての学びにつながりました。横須賀軍港ツアーでは運よく空母「ジョージ・ワシントン」や潜水艦4隻を見ることができ非常に貴重な体験となりました。今後も大人たちが決めたプランに乗るだけの校外学習ではなく子どもたちが中心となって構築する校外学習を目指していくのと、日帰りだけではなく宿泊を伴う社会科見学の実施を目標に動いていく予定です。

〈意見出しのホワイトボードの記録〉



※校外学習の詳細については特別授業ページに記載

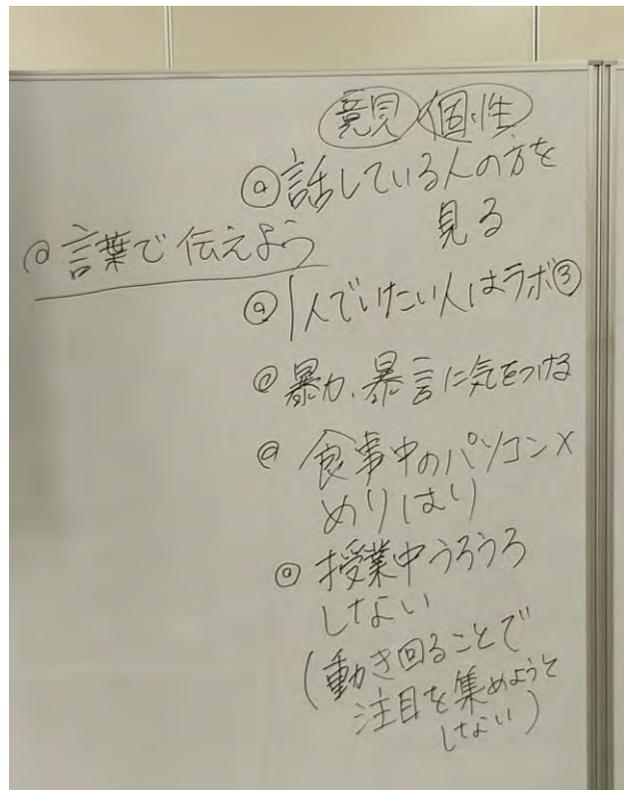
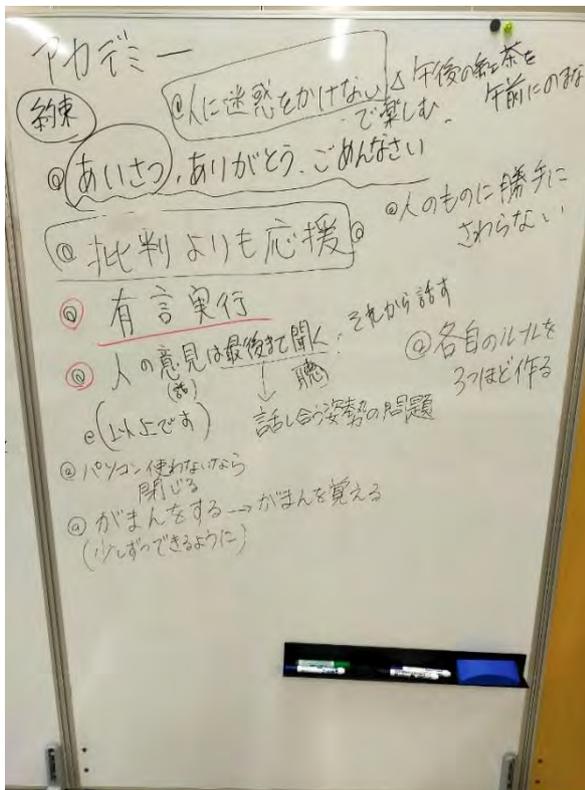
## II-10-2 協働的学びの実証結果 2

### 協働的学びの実証結果 2

#### SEISA アカデミーの新たなルールづくり

星槎の3つの約束、「人を認める・人を排除しない・仲間を作る」は SEISA アカデミーの3つの約束でもあります。学校生活を送るにあたってあまり細かい決まりを作りたくなかったのと必要なときに必要な内容で決まりごとは追加していくのがいいと考えていたため、特に規則を決めることなく SEISA アカデミーをスタートさせました。2年目を迎えたころ、星槎3つの約束は抽象的でこれを守るために具体的に自分たちがどう行動していいかわからない、1人ひとりのとらえ方で3つの約束を実践しては、各々の匙加減になってしまうのでもっと具体化したルールをつくりたい、と生徒から提案がありました。確かに、そのとおりです。この3つの約束の抽象的なあいまいさが良くもあるのだが、SEISA アカデミーの生徒にとってはグレーゾーンは行動を混乱させるものであり、白黒はっきりした指針がある方が行動しやすい。ということで、新たな話し合いが持たれ、SEISA アカデミーの児童生徒が3つの約束を体現するための具体的なルールを作ることになりました。まずは普段の学校生活の中で困っていることから、みんなに気を付けてほしい事など意見出しをしました。

#### 〈意見出しのホワイトボードの記録〉



意見出しの途中で1回目が終了。2回目、3回目はみんなの意見をまとめて、ルールとして必要、必要でないを精査する作業となりました。

### 〈精査する作業〉

必要でないものには網掛けをし、消去していきました。

アカデミーの約束について	
2回目 10月18日(金)	
※目的： 様々な学年の在籍や、特性がありつつも、これからのアカデミーにとってより一層、皆が学びやすさを追求するためのルール作り スタッフからの一方的なルールではなく、一人ひとりにルールを 考えてほしい、また、まとめられたものは完全なものではなくてよい 時期と実践状況をみてみなおしをする	
前回のみんなの意見より	
☆ (あいさつ) ありがとう、ごめんなさい	
☆ 人に迷惑をかけない→約束を守る→人に迷惑をかけない→常識範囲の迷惑	
☆ 人の物をかってにさわらない	※→ステラプラン
☆ 否定(批判)よりも応援	
☆ 有言実行	※→ステラプラン
☆ 人の話を聴く(聞く)	
☆ 自分の意見を言い終わったら「以上です」	
☆ パソコンを使わないなら閉じる	※パソコンに関しての約束事として別に
☆ 我慢を覚える	
☆ 各自のルールを三つ作る	※→ステラプラン
☆ 言葉で伝える	
☆ 話している人の方を見る	
☆ 一人でいたい人はラポ③	
☆ 暴力・暴言に気を付ける	※言葉で伝えるに含む
☆ 食事時のパソコンはなし	※→ステラプラン
☆ メリハリをつけた行動	
☆ 授業中うろうろしない	※メリハリをつけた行動に含む
☆ 動き回りで、注目を集めない	※メリハリをつけた行動に含む
※絞り込みはある程度→さらに言葉の選択	
※個々への対応、説明は必須	
※2回目の全体の参加者の雰囲気は向上	
※発言する側、受け取る側の慣れも見込めた	
※意味が分からない、納得できないがあってもよい	

3回目の話し合いでここまで絞り込むことができました。最後は残ったことをもとにスタッフで5つにまとめみんなに共有しました。このルールを規則だから守ることとするより、みんなが守れるようにチャレンジしていくこととし、アカデミー5つのチャレンジとして教室の見えるところに掲示しています。パソコンの使用についても人に迷惑をかけないように使用してほしいという意見が多かったことから、これは別

でルールを作り同じく掲示しています。計3回にわたる話し合いをもとにみんなが納得するものが完成しました。

<p style="text-align: center;"><b>☆☆☆星槎の約束☆☆☆</b></p> <p style="text-align: center;">人を認める 人を排除しない 仲間を作る</p> <p style="text-align: center;"><b>☆☆アカデミーのチャレンジ☆☆</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>☆ あいさつ・ありがとう・ごめんなさい！</li><li>☆ 人の話を聴こう(聞く)！</li><li>☆ 言葉で伝えよう！</li><li>☆ レジリエンシーを高める！</li><li>☆ メリハリをつけた行動！</li></ul>	<p style="text-align: center;">〈パソコンの使用について〉</p> <p style="text-align: center;">パソコンを使うとき</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○音量に気を付ける</li><li>○使わないときは閉じておく</li><li>○人のパソコンを勝手に開けない、覗かない</li><li>○昼食中はパソコンは使用しない</li></ul>
--	--

## II-11-1 家庭との情報共有 1

ご家庭との情報共有は紙ではなく基本 Google クラスルームを通して実施しています。持ち物管理が苦手な 2E の児童生徒にとって大事なお手紙といって学校から渡されても、他の情報が入ってしまうと忘れることが多々あるため、その日のうちに保護者にわたることが少ないのが現実です。タイムリーに大事なことを共有するにはオンラインが効果的であると考えました。日々の活動や特別授業、宿泊行事などの様子が伝わるよう、クラスルームで写真、動画を共有しています。クラスルームの活用は一方向的なこちらからのお知らせのみの対応になるため、ご家庭で気になること、すぐスタッフと連絡をとる必要があるときは今まではショートメールや直接の電話でやりとりをしてきたが、児童生徒数が増えてからはビジネス用の公式 LINE を開設し、必要があるご家庭は登録してもらい LINE でやりとりできるようにしました。保護者のみではなく、子どもたちからも何かあった時にスタッフと連絡がとれるように子どもたちとスタッフで連絡が取れる LINE アカウントも作成しました。保護者からは面談や保護者会のタイミング以外にも、タイムリーに相談したいことが LINE で来るときもあり、随時対応しているが、このスピーディーな対応が保護者からの信頼につながっていると実感します。子どもたちの心の移ろいやすさや行動の衝動性から思い立ったらその時にやらないと気が済まない、そのときにスタッフに聞いてほしい、など学校ではな

いタイミングで連絡をとることもありました。子どもたちからの声にできるだけ早急に反応できるように保護者と連携してご家庭での様子をできるだけ把握しておくことで、普通の学校生活でも対応を先回りできるように工夫してきました。現在はこの方法で対応していますが、児童生徒数が増えるとまたこのやり方も変えていく必要があります。その時その時でどの方法が一番良いか、状況に応じて今後も判断していきたいと考えます。

子どもたちが作成した作品などをドライブに保存し、スタッフと児童生徒間で共有できる仕組みも作っています。活用状況としてはまだこれからだが、中3女子生徒が作った詩や物語などをこのドライブに保存し、スタッフと共有することで学期末や学年末にポートフォリオとしてまとめ、形に残しています。

## Ⅱ-11-2 家庭との情報共有 2

普通の連絡事項で Google クラスルームと公式 LINE を活用する以外に、毎月、スタッフの思いの丈と月間行事、お知らせ、頭の体操クイズなどを盛り込んだ「煌星(きらぼし)」という通信を発行しています。発行は毎月第3月曜日。この発行も Google クラスルームで共有しています。内容の詳細は以下の通りです。

この通信は、アカデミー内に配信するとともに、個人情報に留意しながら Web ページを通じて対外的にも発信しています。

<https://seisahighschool.ed.jp/academy/column/column-430>

- ① 主任の言葉「MORISHE SAID」
- ② 月間スケジュール
- ③ 今後のお知らせ
- ④ スタッフより「新年の誓い」「おすすめMUSIC/映画/本など」
- ⑤ スタッフより「あいちゃん便り」
- ⑥ スタッフより「YOSSY'S ROOM」
- ⑦ 今月のクイズ
- ⑧ 編集後記
- ⑨ 写真館

※児童生徒作品がある時は随時掲載あり

インスタグラムでも学校の様子を知ることができますが、スタッフからそれぞれの思いや子どもたちの様子、自身のニュースなど言葉(文章)で伝えたい、ということもあり毎回A4サイズで5枚~10枚程度のボリュームで発行しています。現在はこの様式で発行していますが、これで完成形ではなく、ご家庭にとってどのような内容の「通信」が必要があり、効果的か随時改善しながら今後も継続して発行していきます。

2025年度からは、児童生徒で編集室を組織して発行を進めていく計画を立てていま

す。

## Ⅱ-11-3 家庭との情報共有 3

### 保護者会、保護者セミナーの実施

2 ヶ月に 1 回、定期的に保護者会を実施しています。アカデミーからのお知らせを直接顔を合わせて伝えるという目的もありますが、様々な悩みを抱える保護者同士がコミュニケーションをとることでの「つながり」を大切にしています。また、年に1回ゲスト講師を招き、保護者セミナーを実施しています。子どもたちだけではなく保護者に対しても悩み解消や子育てのヒントにつながる情報提供ができるよう、機会を設けています。

〈保護者セミナー実績〉

2023 年 7 月 日本自閉症スペクトラム学会 顧問 寺山千代子氏

2024 年 7 月 NPO 法人 エッジ会長 藤堂栄子氏

## Ⅱ-12 学修状況の把握や評価

### 1. 基礎学力の向上にむけて

学修状況の把握について、現状課題としているのは「基礎学習」への向かわせ方です。1 年目は子どもたちの好きな所から学習を始めていくがテーマだったがゆえに、国数英の基本的な学習からは離れたところからスタートしました。2 年目は児童生徒数が 16 名と増加したことから、基礎学習にも力を入れていくタイミングだと判断し午前中の基礎学習の時間には「すらら」「Qubena」の AI ドリルをより活用し(一部スタディサプリを選択している子もいる)、まずは好きな科目からでいいので1時間はドリルに取り組む、という習慣づけをしてきました。とにかく椅子に座って、ソファに座って、自分の集中できるスタイル、場所でいいので AI ドリルと向き合う時間を作りました。習慣づけができたところで、後期はやっている中身の問題にも切り込みました。ICT 活用で「好きな所から学習を始める」ことは子どもたちにとって束縛されない学習ができたことで自分のペースで学んでいくことの心地よさを感じることができ基礎学習への抵抗は比較的なくなったと感じていました。次のステップとして、今自分が取り組んでいる科目にプラス 2 科目、苦手な科目や取り組んだことのない科目に目を向けてみよう、を後期のテーマにし実践してきました。これもこちらが中身までを管理してしまうと窮屈に感じてしまうため、あくまでも科目数を増やす、を目的に取り組ませました。今までは好きな科目を 1~2 科目やっていたのに対し、後期は 3~4 科目取り組む生徒が増え、自分なりにではあるが各科目のバランスを考えながら取り組むことができるようになってきました。小学生、中学生が中心の学び舎である以上、学習指導要領に基づいた義務教育の内容を網羅することの重要性を感じています。これは好きなことに対する学習の時間を奪うことではなく、普段目を向けないことで狭まってしまう「視野の拡大」と嫌

なことにも取り組んでみるという負荷をかけることで養われる「精神力の強化」につなげていくことが目的です。

来年度の取り組みとしては ICT を用いた学習の効果をみるために定期的な確認テストの導入を検討しています。この2年間は細かい確認はせず、児童生徒主体でやってきたが、今どのくらいの力がついたのか、一般的な学年でいうと何年生のどのあたりにいるのかを見える化し、学習意欲の向上につなげていきたいと考えています。また、ICTに頼り切る学習ではなく、紙ベース、テキスト活用の学習も個別に取り入れ、さらなる個別最適化を目指していきます。

## 2. SEISA アカデミーの学力検査

SEISA アカデミーとしての学習全般の効果をはかるものさしとして23年度後期から学力検査を実行しました。科目は国語、数学(ベーシック/アドバンス)【必須】、英語【選択制】の3科目です。テスト範囲がない、総合的な学力をはかる問題形式で出題し、全国学力調査やPISAの問題を参考に作成、出題しています。全学年が同じ問題に挑むため、基礎から応用問題、クリエイティブ問題と幅広く、その点数に応じてグレード付けをしました。国語・数学においては学年相応、または学年以上の力を発揮する児童生徒が大半であったため思考力においては自信をもっていいと言えますが、だからと言って教科書準拠の基本的な問題が解けるとは限りません。SEISA アカデミー独自の学力検査での評価と教科書に基づいた学年相応の評価の両方が分かるよう、日々の学習で工夫をしていく必要があります。この2年間はSEISA アカデミーの学力試験による点数とグレード付けを評価としてきましたが、来年度はこれをもっと具体化し、チャート形式で子どもたちの具体的な力を表し、可視化していく予定です。

### 学力検査の問題より

〈日本語〉

問8/11 以下のNHKのニュース報道記事(2024年12月13日)を読んで問いに答えなさい。

埼玉県の女子高校生4人が「闇バイト」に応募して特殊詐欺に関わり警察に検挙されていたことがわかりました。「現金を受け取って運ぶ仕事」などと勧誘され闇バイトに応募していたということです。埼玉県に住む15歳から17歳の女子高校生4人は、ことし7月から9月、埼玉や東京であった複数の特殊詐欺事件に関わったとして警察に逮捕され、家庭裁判所に送られました。警察によりますと、このうち16歳の高校生がことし7月、SNSを通じて闇バイトに応募し友人3人も誘って特殊詐欺の「受け子」や「出し子」などを繰り返していたということです。この高校生はSNSで時給の高いアルバイトを探していたところ「現金を受け取って運ぶ仕事」などと勧誘され闇バイトに応募していました。調べに対し「遊ぶお金が欲しかった。犯罪かどうかは自分なりに調べて大丈夫かと思った」などと供述しているということです。1件あたり数万円の報酬を受け取っていたとみられ警察は指示役の特定など実態解明を進めています。(NHKのニュース報道記事(2024年12月13日))

どのような事件に関する報道なのかを5W1Hを明らかにしてまとめて回答欄に記載ください。5W1Hとは、「When (いつ)」、「Where (どこで)」、「Who (誰が)」、「What (何を)」、「Why (なぜ)」、「How (どのように)」という、5つの「W」と1つの「H」のことです。

## 〈英語〉

### 問題4 クリエイティブ問題

(1)(2)1問10点(20点) (3)各5点(15点)

(1)もしあなたが新しい英単語を発明できるとしたらどんな英単語にしますか？自由な発想で答えてください。ただし、どういう意味か説明書きをきちんとつけてください。(説明書きは日本語可)全く新たな単語でもいいですし、例のように2つ組み合わせて新たな1つの単語をつくる、でも構いません。

(例)

**Chillax** = Chill + Relax: To calm down and relax at the same time.

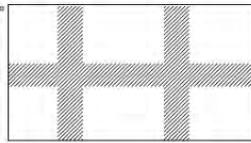
## 〈数学：アドバンス〉

(15) 連続する3つの偶数がある。中央の数の3乗から小さい数と大きい数の積の7倍を引くと中央の数を60倍したものより28大きくなった。3つの数を求めましょう。但し、この3つの数に0は含まれないものとする。

回答を入力

Q3 次の文章を読み、問いに答えましょう。

縦の長さが10m、横の長さが18mの土地がある。  
その土地に同じ長さの道が縦に2本、横に1本通っている。道の部分を除いた土地の面積が $112\text{m}^2$ となるとき、道の幅を求めましょう。



(16) 上の道幅を求めましょう。

## 〈数学：ベーシック〉

音が空気中を伝わる速さは、気温によって変化します。

気温が $t$ °Cのときの音の速さは

$(331.5 + 0.6t)\text{m/s}$  という式で表すことができます。

(7) 次の①～③のうち、音が伝わるのが早い順に答えましょう。

①冬の苗場スキー場 ②夏の沖縄の海中 ③今日の星槎中のグラウンド

回答を入力

(8) ある花火大会で家から花火を見ていたら、花火が見えてからちょうど2秒後に音が聞こえました。気温が30°Cのとき、音の速さを求めましょう。

回答を入力

## Ⅱ-13 本籍校との関り

### SEISA アカデミーと本籍校の関り

小学生は居住地の小学校に籍があるため、SEISA アカデミーをフリースクールとして利用することになります。基本的にはフリースクールへの出席は在籍小学校でも出席として認められますが小学校の校長判断によるため、アカデミーへの入学が決まればこちらから小学校へ出向き、ご挨拶と SEISA アカデミーの説明をさせていただいています。出欠状況の報告については毎月月末にメールで報告か、学期末に数か月分を紙にまとめて郵送など各小学校の報告方法にあわせています。報告内容は毎月の出欠状況と毎日の活動日記を簡単に文章でまとめたものを送り、学校行事や特別授業があった際にはその様子の写真や動画を併せて送っています。送る資料の中で、できるだけ SEISA アカデミーの学校生活や人間関係、学校行事への参加の積極性、子どもたちの成長などが伝わるように工夫していますが、内容で気になる点がある場合は担任の先生から直接お電話をいただき、詳細を口頭で伝えることもあります。本籍校には SEISA アカデミーの考えにご理解いただき、間接的にではあるが児童生徒を見守る形で協力していただいています。

### ご家庭と本籍校の関り

ご家庭と本籍校の関りは双方の関係性もあるのでそれぞれに一任しています。定期的な家庭訪問があるところもあれば、学期ごとに1回ずつ、もしくは年に1回、小学校で面談をするところもあるようです。本籍校とご家庭で直接のやりとりが難しいところに関しては間に入ってつなぎの役割をすることもありますが、それは稀なケースです。

## Ⅱ-14-1 児童生徒の変化 1

児童生徒の数が初年度 6 名から 2 年目 16 名に増加したことで 2 年目の雰囲気は活気のある場所となりました。もともとコミュニケーション力がある児童生徒が集まっているわけではないので人間関係では苦労する部分もあるだろうと予想していましたが、2 年目の前半までは全体的に様子見で温かな学校生活を過ごすことができました。後半から 1 人ひとり遠慮なく自我が出始めたところで衝突が起こるようになってきました。たいていのケースは〇〇からこう言われた、言った、言わない、の押し問答であったり、〇〇が落ち着きがないので気が散る、感情的になるので場の雰囲気が壊れる、など自分がどうであるかはさておき、人の言動が気になる、どうにかしてほしいというものでした。「人がどう思うか」という客観的な視点が欠けており、人を責めることが日常となっていました。SEISA アカデミーの治安維持のため、アカデミー 5 つのチャレンジを作ったのですが、5 つのチャレンジを作る前にも、衝突があった双方に対して時間をかけて対応してきました。その対応、処置は以下の通りです。

#### 小4 男子児童と中1 男子生徒

小4 男子児童からの相談。中1 の男子生徒に言われる言葉が意地悪で怖い。レクリエーションの時間も自分は学年が下なので狙われていじめられている気がする。

→小4 の児童と中1 生徒を個別で話をし、対応しました。小4 の児童には今までどういった場面で嫌な思いをしたか引き出してしっかり聞き取りをしました。それはなぜ起こってしまったのか相手からされたことだけを引き出すのではなく、前段階の状況も確認することで、自分の言動が問題の引き金となっていないか冷静に状況を確認しました。「でも～」など反論もあるが、一通り吐き出しをすることで気持ちを落ち着かせるのと、混乱した頭の中を整理してあげることが肝要だと考えて対応しました。その後、どうしたら状況が改善するか改善策を一方向的に伝えるのではなく一緒に考えることが大事で、自分の言葉で「じゃ、こうしてみる」と締めくくることが納得していきました。やってみてダメだったらまた考えよう、と1 回では解決しないこと、トライ＆エラーで継続して改善に向けて一緒に動いていくスタッフの姿勢を見せることが大切だと考えています。中1 男子に対しても学年が上なだけに、年齢差、対格差、力の差、様々な「差」があることを認識させ、年下と同じ目線で行動するのではなく、年上なりに思いやりをもって対応してあげることが必要だと話をしました。また、嫌な対応をされても強いマイナスな言葉で文句を言うのではなく、論理的に何が嫌だったかを相手に伝わるような言葉で説明しよう、とアドバイスをしました。その伝え方で理解できる力がある生徒なのでそのようにアドバイスしたが、頭では分かっているにもかかわらず体現できるものではないのでその場ですぐ注意し、「今は適切ではなかった」と指摘し続けることが重要だと考えています。その後も、この対応を細かく実施し続けたことでお互いに距離の取り方や、言われたときの返し方、相手に伝わる言葉かけを意識できたことで数か月後にはまるで兄弟のような関係になり一緒に下校できる仲にまで成長しました。

#### 中1 男子生徒

自分が作成した作品を心無い言葉で侮辱されたことで傷ついた、と中1 男子生徒間でトラブルが起きました。これは双方というより、言った方にウェイトを置き指導を実施しました。もともと言葉が強くなる傾向があったので問題が起こったこのタイミングが指導のタイミングだと判断し、対象生徒 A に対して別プログラムを組みました。まず、1 週間はみんなと一緒に授業を受けることができないとし、スタッフルームで別室対応、SST 中心のカリキュラムを組みました。もちろん内容については保護者面談で納得をしていただいてから実施しました。

終日、スタッフルームでスタッフと活動、全体で実施する授業はスタッフルームからオンラインで参加という形にし、他の児童生徒と直接の接触がないようにしました。みんなと一定期間距離を置いて、大人としっかり話をすることで次第に落ち着

きを取り戻し、考えてから言葉を発しようとする気遣いも見られるようになりました。この期間だけで180度変わったかというそうではないですが、自分の言ったこと、してしまったことを振り返る時間をとることで別室対応はある程度効果が見られました。2か月後、意識が薄れてきたところで同じ生徒がまたトラブルを起こしますが、その時はスタッフルーム滞在を2週間にし、この期間の校外学習も不参加とし、前回よりもスタッフと過ごす時間を増やし、他の児童生徒との関わりをかなり制限しました。今回は楽しみにしていた行事に参加できなかったこともあり、2週間の間、大人との関り中心の学校生活にさすがに寂しさを感じているようでした。トラブルで被害を受けた生徒の方がいたたまれなくなったのか「自分も悪かった、ごめんね」と謝罪し、一緒にスタッフルームで昼食をとっていました。微笑ましい2人の様子を見ながら、大人があれこれ手出ししなくても子どもたちは自分のタイミングで行動に移し、失敗しながらも人間関係の構築をしていくものなのだとスタッフ側も勉強になった瞬間でした。

いくつかの例を出したが、トラブルは日常茶飯事に起こっており、もはやそれはトラブルではなく子どもたちを成長させてくれる機会としてスタッフもとらえられるようになってきました。学校生活の中で人との衝突を繰り返しながら実践的にコミュニケーションの取り方や人間関係の構築の仕方を学び、児童生徒たちは月日を重ねるごとに変化してきました。この経験を通して、SEISA アカデミー5つのチャレンジが子どもたち中心の話し合いで誕生し、学びに集中できる環境を自分たちで作ろうとしている動きが一番の成長といえると考えています。

## Ⅱ-14-2 児童生徒の変化2

### 学習に対する意欲向上

基礎学習の定着は【学修状況の把握や評価】のところで述べたとおりですが、2024年の後期からさらに基礎学力向上のため「朝学」を導入しました。毎日9:15~9:30までの15分間。簡単に朝礼をやってからすぐに朝学に取り掛かります。すでに小学生には2024年前期から導入していましたが、その内容はクロスワードやバラバラ漢字、ナンプレを中心とした頭の体操程度の問題をウォーミングアップとして実施していました。中学生に対しては拒否反応があったため取り組んでいなかったが、普段の基礎学習に対する意欲の低さから、むしろ中学生にこそ必要だと実感し、後期より導入しました。ここで気づいたのは小学生はまだ学習に対する拒否反応が少なく、不登校の経験があっても学習に対して不安があっても取り戻せるチャンス(時間)や心の余裕があることから比較的「やってみる」ことに対してハードルが低いということです。中学生にもなると思春期もあるのか、今までの学校生活での失敗経験が思い出され、嫌な思い出しかないものをまたここでやるのか、と一歩踏み出すことに時間がかかることが分かりました。これは学習以外のことにも共通していますが、すんなり受け入れる小学生に対して中学

生はじっくり時間をかけて説得していく行程が必要なケースが多々あると感じています。厳密にいうと一概にも小学生と中学生でくくる話でもないですが、普段接している感覚ではその傾向が大いに見られます。中学生に対しては「朝学」に対する拒否反応を少なくするため、最初は小学生と同じような内容から始めて、徐々にレベルアップをはかり学年相応の数学の問題を出していきました。最初は「分からない」ことを悟られたくない、見られたくないという気持ちからスタッフに見られないようにプリントを隠すように取り組んだり、どうせわからないからと途中で投げ出したり、問題を見て最初からあきらめてプリントをもらわなかったり、様々な反応がありました。その中でも中3と高1の2名が最後まで集中して解くことを継続し、分かる問題はヒントを出してくれたり、解き方を教えてくれたり、粘り強く取り組む姿勢を見せてくれる中で、次第にみんなでプリントに取り組む雰囲気が出てきました。時には若いスタッフも生徒に混ざり、一緒に問題を解いています。よく、人に教える時間は無駄ではないか、と考える人もいるかもしれませんが、高1の生徒が「人に説明できるということはその問題が完全に自分のものになったということ」と下の学年の子に言っていました。異学年で学習することの意味がこの朝学にはあります。そして確実にこの15分間は生徒の基礎学習に対する意識を変えることにつながっています。最近は15分の終わりのチャイムが鳴っても次の時間まで考え込んで解くのを止めない空気になってきました。これはこれで過集中の特性が出ており、なかなか区切りを付けられず次の行動に移れない状況になってしまっているのですが、SEISA アカデミーはこれを強制終了するような場所ではないので次の授業の影響が出ない限りは納得するまで取り組ませています。見ていてアカデミー生らしい、うれしい光景です。この「とことん」集中する感覚が他の学習にもつながって、もっともっと自分らしい探求ができるようになってほしいと思っています。現在朝学は数学の問題が中心ですが、数学に取り組む目的の1つとして、1年後の算数・数学オリンピックにもチャレンジできるような力をつけたいと思っています。今後は個々に応じて科目も変えていく必要があり、国語が得意な児童生徒には時々国語もはさんでいく予定です。数日前、学習意欲が上がっている生徒から「アカデミーの時間割は基礎学習の時間が少ないと思います。」と、うれしい意見をもらいました。こういった声が生徒から上がってくるのを待っていたので、現場としてはやっとここまでできたかという思いと、さらに次のステージにいく確信を持つことができました。

この1年間で漢検、数検、英検と検定を通して今の自分の実力がどのくらいかを知りたい、と継続的に検定を活用する児童生徒も現れ始めた。まだまだ特定の児童生徒のみの取り組みになっているが目標設定をし、検定日から逆算して計画的に学習に取り組む姿は他の児童生徒にもいい影響を与えています。「朝学」にしろ、「検定」にしろ学習意欲を向上するいい手段になっているので、この毎日の積み重ねを大事にしていきたいと考えています。

## Ⅱ-14-3 児童生徒の変化3

SEISA アカデミーの時間割ですが午前中は基礎学習を中心に、国語、数学、英語の教科学習に加え、ART やレクリエーション、パソコンの授業を実施しており、午後は探究の時間として個々の興味・関心や能力に合わせた教科横断的な探究や研究活動を行っています。探究の時間に取り組んでいる子どもたちの学びは「マイプロジェクト」と呼ばれ、それぞれ子どもたちが興味・関心のある分野に自ら学びを深めることができるよう、大学・企業・研究機関など専門性の高い機関と連携し、社会全体で子どもたちを育む教育環境の実現を目指しています。教科にとらわれない独自の視点や、突き抜けた学びでこれからの日本の未来のカギとなる人たちを育てるためのプログラムとなっており、学期末の年二回発表の場を設けています。前回 2024 年 9 月に行った発表の内容は多岐にわたり、編み物や遺伝子、DTM (Desk Top Music の略で、パソコンを使った音楽制作を表す) など、本人の興味・関心に沿った内容となりました。

探究学習は自分のペースで進められるため、本人の興味や必要に応じたアプローチを見つけることを意識して子どもたちの指導にあたりました。発表する日をあらかじめ設定して、どのような発表方法が適切なのか検討し計画を立て、探究学習の時間割やスケジュールを作成することで、自ら学習を行う習慣をつけさせることを試んでいます。また、他のアカデミー生や保護者の前で発表することそのものが、子どもたちの成長のきっかけとなることもマイプロジェクトの大きな役割の一つです。人前での発表経験が全くない子や自信がない子どもであっても参加できるように、発表方法や発表形態などを子どもたちと綿密に打ち合わせをして、発表時の順番も工夫することで、子どもたちが発表しやすい環境を実現することも心がけています。本番の直前までリハーサルを行うことで効果的なスライドや資料の作成方法を学ぶだけでなく、効果的に情報を伝えるための言葉や非言語的な表現(ボディランゲージやアイコンタクトなど)を学んでいます。こうした取り組みにより、吃音の症状を自覚している中学3年生のKさんは、症状を治すのではなく症状を受け入れて、耳にメトロノームのような一定間隔の音を流すことや発言内容のメモを作るといった工夫ができるようになり、苦手意識があった人前での発表ができるようになりました。プレゼンテーションの発表のなかで様々な特性を持ったアカデミー生が周りにいたことについて発言があり、SEISA アカデミーの環境が吃音を克服しようというモチベーションにもつながっていると考えられます。Kさんのマイプロジェクトの発表によってKさんの特性を他のアカデミー生が理解するだけでなく、自分の特性について深く知ることの大切さを意識させる良い機会となりました。多様な子どもたちの資質・能力を育成するための個別最適な学びと、異なる特性、興味・関心を持つ中でも、子どもたちが互いに認め合い、共に学び合うことのできる協働的な学びの実現も目標の一つとなっており、プレゼンテーションの発表はSEISA アカデミーをそのような学びの場へと変化させるきっかけとなりました。また、保護者にとっても自分たちの子どもの日頃の探究学習を再確認できる場となっており、多様な子どもたちの興

味・関心や理解度、認知特性に応じて、学年や学校種を越えた学び（早修）や学年を越えた学びがより柔軟に実現できる場所へと変化しつつあることを実感していただけたと考えています。SEISA アカデミーでは、子どもたちの「なぜ？」や「どうして？」を起点とした好奇心に基づいたワクワクや特異な才能・能力が環境によってふたをされることのないように、とことんやりたいことを突き詰める学び舎の実現を目指しています。今後も自分の好きな分野や得意な分野の才能を伸ばし続けることができる探究活動を通して、教科の枠を超えた横断的・総合的な探究学習の充実により枠にとらわれない多角的な視野の育成と主体的に没入できる学びの実現を目指します。

## Ⅱ-15 2E 対応 SEL

### 1 はじめに

本章では、令和6年度におけるSEL（社会性と情動の学習）を提供する側である教職員やアカデミー関係者、保護者及びご家族とでSELへの気づきと必要性を同一線上で共通理解を行い、協働をはかることを目的とし、STELLAR PLAN（星槎が開発したオンラインIEP作成システム）を活用した取り組みを実施し、成果としてまとめました。

SELは、児童生徒が自らの感情を理解し、自己管理を行い、他者と良好な関係を築く力を養うための重要な学習領域です。しかし、従来の学校教育においては、学力向上が主な焦点となり、SELのような情動面の発達支援が十分に行われてこなかったと考えられます。そのため、今後学校だけでなく家庭や地域も一体となった取り組みが求められます。これを実現するために、STELLAR PLANを導入し、活かされ、教育現場と家庭の双方でSELを効果的に実践できる環境の整備に努めることが必要です。

### 2 SEL環境構築の必要性と取り組み

#### 2.1 SEL環境構築の課題

SELを効果的に実践するためには、学校と家庭が一体となり、児童生徒の社会性や情動面の成長を支援する環境を整える必要があります。しかし、以下の課題が存在しました。

- SELの重要性についての認識に個人差がある。
- 学校と家庭の連携が十分に取れていないためSELの実践が学校内に留まりがちである。
- 児童生徒のSELの進捗を可視化する手段が不足している。
- 現在、日本で拡がりを見せているSELプログラムはCASEL（Collaborative for

Academic, Social, and Emotional Learning)がベースであり、SENG (Supporting Emotional Needs of the Gifted) が行うSELとはいくつかの重要な違いがあることも分かった。

SENGのSEL：

SENGは、感情的ニーズに特に焦点を当てたSELアプローチを採用している。SENGのSELは以下の特徴を持っている：

- ① 才能児に特化：高い知的能力を持つ子どもたちの特殊な感情的・社会的ニーズに対応している。
- ② 個別化されたアプローチ：才能児の個々の特性や課題に合わせたサポートを提供している。
- ③ 過剰興奮性への対応：才能児によく見られる感情や感覚の強さに焦点を当てている。

CASELのSEL：

CASELは、より広範な学生層を対象としたSELアプローチを提唱している。CASELのSELの特徴は以下の通りである：

- ① 5つの主要能力：自己認識、自己管理、社会認識、対人関係、責任ある意思決定に焦点を当てている。
- ② 包括的アプローチ：教室、学校全体、家庭、地域社会を含む多面的な実践を推奨している。
- ③ 一般的な学生対象：特定の才能や能力に関わらず、すべての学生の社会的・感情的スキルの向上を目指している。

主な違いについて：

- ① 対象：SENGは才能児に特化、CASELはより広範な学生層を対象としている。
- ② 範囲：SENGはより個別化されたアプローチ、CASELはより包括的なアプローチを採用している。
- ③ 焦点：SENGは才能児特有の感情的ニーズに焦点を当て、CASELは一般的な社会的・感情的スキルの開発に重点を置いている。

両者のアプローチは、社会的・感情的学習の重要性を認識している点で共通しているが、その実践方法と対象者に違いがあります。

- CASELとSENGのSEL共に、日本特有の人・風土・文化と掛け合わせたニーズベースが異なるため、日本で広げる必要のある特異な才能や2Eの児童生徒向けのSELプログラムの開発と普及が必要であることも明らかになりました。

- 日本では、支援教育の根底に、SST（ソーシャルスキルトレーニング）の文化が特に定着化しており、星槎でもSSTが長年実施されていることから、SST指導を汎用したSELプログラムの導入が求められると感じました。

また、SENGとCASELがそれぞれ進めるSELの違いを踏まえた上で、それぞれの有効性についても確認されました。CASELのSELは、学校教育の枠組みの中で社会的・情動的なスキルを体系的に育成することを目的としており、幅広い学習環境での汎用性があります。

一方で、SENGのSELは特異な才能のある児童生徒の特性に着目し、彼らの内面的な情緒的成長や自己理解を深めることを重視するアプローチです。SEISAアカデミーにおける実践の中で、CASELの体系的な枠組みを参考にしつつ、SENGの個別化された支援が特に特異な才能のある児童生徒や2e児童生徒に対して有効であることが確認されました。

## 2.2 取り組み内容

これらの課題を解決するために、STELLAR PLANを活用した包括的SELアプローチをローカライズし、SEISAアカデミーの環境下で実践することで、家庭での実践へとつなげる仕組みを構築しました。具体的には、以下の施策を実施しました。

- SELポータルの開発：児童生徒の社会性や情動の成長を記録し、学校と家庭が共有できるオンラインプラットフォームを導入。これにより、保護者もリアルタイムで学校でのSELの取り組みを把握し、家庭での対応がしやすくなった。
- 教職員・保護者向けSEL研修：SELの基本概念や指導法についての研修を定期的実施し、関係者の理解を深めた。これにより、SELの重要性に対する認識の差が縮まり、より統一的な指導が可能となった。
- 家庭との協働強化：家庭におけるSEL実践のためのガイドラインを作成し、学校と家庭が一体となった取り組みを推進。家庭内でどのようにSELを実践すれば良いかの具体例を示し、保護者が実践しやすい環境を整えた。
- クラス場面と家庭のつながりの可視化：学校でのSELの取り組みが家庭でどのように実践され、効果を発揮しているかを可視化し、フィードバックを共有する仕組みを導入。
- SSTを活用したSELプログラムの開発：日本の教育文化に適応したSELの展開として、SSTの要素を取り入れたプログラムを検討。

## 3 取り組みの成果

### 3.1 児童生徒の変化

- 自己認識力の向上：自身の感情を適切に理解し、表現できる児童生徒が増加。感情日記や振り返り活動を通じて、自分の気持ちを言語化する力が高まった。
- 他者認識と共感力の向上：対話や協働の場面で、相手の気持ちを考えた行動が増えた。特にグループ活動において、相手の発言に共感を示し、適切な応答をする場面が増えた。
- 自律性の向上：学習意欲の向上に加え、家庭学習の習慣が定着。感情をコントロールするスキルが身についたことで、学業への集中力も向上。
- あいさつする、御礼を伝える、謝る、人の話を聞く（聴く）、言葉で伝える、レジリエンスを高める、メリハリをつけた行動をとるという具体的な目標に辿り着き、実践できるようになった。
- 『星槎の約束』（人を認める・人を排除しない・仲間を作る）の具体的な行動指針が明確になり、児童生徒が日常の中でチャレンジしやすくなった。

### 3.2 保護者の変化：

- SELに対する理解が深まり、家庭内での実践が増加。保護者向け研修やガイドラインを活用し、子どもとの関わり方が変化した。
- 児童生徒の情動面の成長を可視化することで、より適切な支援が可能に。ポータルを通じて子どものSELの成長を把握し、家庭での対応がスムーズになった。

### 3.3 教職員の変化：

- SELの指導がより体系的に行われ、児童生徒の行動変容を促す指導が可能に。研修によって教職員の指導スキルが向上し、具体的な指導方法が確立された。
- データを活用した個別指導の精度が向上。学校と家庭で情報共有が進み、一人ひとりの児童生徒に適した指導が可能となった。

## 4 今後の展望：

SELを育む風土や文化を日常化するために、今後は以下の取り組みを強化します。

- 家庭と学校の連携強化：家庭内でのSEL実践事例を収集・共有し、保護者同士のネットワークを構築。家庭での成功事例を学び合う機会を設ける。保護者向けのワークショップや情報交換の場を設け、家庭内でのSEL実践を促進。
- SELカリキュラムの発展：SEISAアカデミーに於けるSELの取り組みをさらに体系化し、学年ごとの目標を明確化。学年別のSEL目標を策定し、学習指導要領と連携させる。
- 実証研究の推進：SELの実践が児童生徒の学力向上や情動発達に与える影響を科学的に分析し、エビデンスに基づく指導法を確立。SELの成果を数値化し、教育効果を検証。
- 特異な才能・2e児童生徒向けSELプログラムの開発：CASELやSENGのSELプログラ

ムの違いを考慮し、日本人日本文化に応じた特異な才能・2E児童生徒に適したSELプログラムを開発し、普及を進める。SENGのアプローチを活用し、特性に応じたSEL支援を確立。

- SSTを活用したSEL指導の確立：日本の教育現場で受け入れやすい形でSELを広めるために、SSTを活用したプログラムをさらに発展させる。日本の教育文化に適したSELプログラムを設計し、全国的な展開を目指す。

このように、STELLAR PLANを活用した包括的SELアプローチを発展させることで、特異な才能のある・2E児童生徒の自尊感情や他者認識の向上を図り、学習意欲の向上や自律的な行動の促進につなげていく。

## Ⅲ 事業のまとめ 運営指導委員会より

### Ⅲ-1 運営指導委員会より

才能と障害を併せ有する児童生徒への対応と変容

SEISA アカデミーにおける2E（才能と発達障害を併せ持つ）児童生徒への教育実践を通じ、一年間でこども達には大きな変容が見られた。本研究での学期ごとの訪問を通じ、その変化を明確に観察することができた。

初めに、多くの児童生徒は不登校を経験していた。その理由は、学業の困難さだけでなく、授業への興味の欠如や集団生活の困難さにあった。知的能力が高いために授業が退屈に感じられる、環境音に敏感で耐えられない、こだわりが強く集団行動に適応しづらい、同級生と話が合わない、いじめを受けるなどの要因が挙げられる。初期の段階では、不安や諦めから教員や学友との関わりを避け、自身をうまく表現できず、登校や教室への参加が困難な様子が見られた。

次の学期には、私自身が2Eでありながら大学院まで進み、社会で活躍していることや、LD（学習障害）がありながら海外の大学で教鞭を執る長男を育てた経験を基に、保護者向け講演を行った。保護者たちの多くは、「普通」の学習や生活に戻るべきか、多様性を尊重すべきか迷いを抱えていた。講演を通じて、2E児の特性を理解し、それを受け入れることの重要性が共有された。

その後、英国の著名な画家マッケンジー・ソープ氏の絵画を題材にした「感覚共有アートプログラム」を実施した。児童生徒は、絵画の細部を観察し、哲学的な考察を交えながら議論を深めた。例えば、転生輪廻や人生の移ろいと自然を重ねて考察し、オフィーリアとの関連を見出すなど、独自の視点で表現できるようになった。自身もディスレクシアであるソープ氏は児童生徒の自由な発想と洞察力に感銘を受けていた。このプログラムを通じて、彼らの感性や知的好奇心が解放され、「常識」や「一般論」に縛られず、自分の考えを言語化するなど自己表現の力を高めた。

さらに、2Eの藤堂高直氏が自身の経験を語る講演では、児童生徒が積極的に質問し、一つの話から次々と議論が広がる様子が見られた。特に講師が共有した困難さやそれに対する解決方法に児童生徒は敏感に反応していた。講師自身も「これまでで最も反応が良かった」と語るほど、活発な交流が行われた。

日頃からのアカデミーにおける取り組みを通じ、児童生徒たちは自己肯定感を高め、他者を理解する力を養ってきたことがうかがわれる。個別対応によって、自身の才能や感性を追求することへの安心感を得た。そのことが他者とのかかわりとなり、自分だけが特異な存在ではないことを認識し、集団における自分の立ち位置を見つけることにつながっている。

今回、同じ経験を持つ先輩の話聞くことで、ロールモデルを見出し、違っていても大

丈夫であり、「できないこと」をできるようにするのではなく「できること」で勝負する勇気が芽生えた。

本研究を通じ、2E 児童生徒に対する適切な支援が、彼らの自己理解と社会適応を促進することが示された。これからの教育現場においても、彼らの個性を尊重し、伸ばす環境の整備が求められる。(藤堂)

☆☆

### 「SEISA アカデミー」の社会的認知を高める必要性

SEISA アカデミーの運営指導委員として 2024 年度は 3 回の運営指導委員会に参加するとともに土曜体験講座も聴講し、月刊『生徒指導』（学事出版）の 2024 年 10 月号のコラムで「アカデミー」の取り組みを紹介しました。メディアに長く関わってきた立場から、「アカデミー」の社会的認知を高める必要性について、若干の報告をいたします。運営指導委員になって以降、筆者のスマートフォンにも、インスタグラムで毎日のように「アカデミー」の活動が動画で配信されてきます。その数はまもなく 500 件になるようとしています。

そしてその映像からも、本報告書にある星槎グループの「科学する学校」の精神が見えます。土曜体験講座で筆者が聴講した「かき氷づくり」もまた、「科学する」講座でした。さらに、前述のコラムでも紹介した流体力学を教わる中学生など、「特異な才能」を垣間見る機会もありました。学びが長い間、教科・科目で切り分けられてきたことの、ある意味での弊害を取り払おうとしているという意欲も感じました。

筆者は前身の「宮澤学園」も含め、星槎グループに関わって 25 年以上になります。この間、「星槎」自体の認知度がかなり高まったことは肌で感じます。「星槎大学客員教授」を名乗ると、「ああ、特別支援の…」という反応をいただくことが増えてきたからです。その意味では、「アカデミー」の説明会の参加人数や入学者数、そして運営委員会での説明を聞く限り、その活動についての認知が、社会一般に広がっているかということ、まだ途上と言えるでしょう。

認知が広がらない背景のひとつに説明の困難さがあるように思います。「アカデミー」の紹介チラシで示されている「テキストマイニング」の言葉群（「タレントッド」「2E」「学びのアスリート」「Gifted」「尖った才能」「異才」等々）が示すように、「アカデミー」で学ぶ子どもたちがどんな子どもたちで、「アカデミー」がなぜこうした取り組みをしているのかを説明するのは容易ではありません。

「アカデミー」は結果として、「できちゃう人も取り残さない」というキャッチフレーズを選んでいるようですが、このチラシをつくる段階でもかなり試行錯誤があったことが想像できます。

「ひと言では語れない」取り組みを、SNS 全盛の時代に、何を使ってどう情報発信するのが有効なのか。正解はありませんが、認知度を高めていく取り組みは、今後より重要

さを増します。「アカデミー」を必要とする子どもたちは全国に点在しており、そこに情報が届かない限り、「アカデミー」に対する関心や評価は、今以上に高まらないからです。

せっかく「星槎グループ」があるのですが、グループをあげた PR を、あらゆる機会を使って進めるべきではないかと考えます。もちろんそれはネットや紙媒体にとどまりません。対面で伝える機会も増やすべきでしょう。またインスタグラム等の SNS での発信は日々の記録としてはよいのですが、これを集約した何らかの媒体を作る必要性もあるのではないのでしょうか。

「アカデミー」を継続していく中で、進路の問題は今後より顕在化していくことでしょう。この点は、運営委員会の場でも、既存の学校制度との兼ね合いをどうしていくかは議論になっていました。保護者の選択のための情報が必要になるからです。

その点でも情報発信をしっかりしていくことが「アカデミー」の持続可能性を高めることにつながります。筆者も長い道のりを側面から支援していきたいと考えております。  
(中西)

☆☆

実際に SEISA アカデミーがスタートしてあっという間の 2 年間、実証研究協力校の主任として多くの場面で SEISA アカデミーの環境づくりや児童生徒の学習活動に参加させてもらった。実習研究協力校である星槎中学校は 2005 年に開校した全日制の中学校である。「教育課程に関する文部科学省指定校」として、一般的な学校生活になんらかの理由で馴染めず、場合によっては学校へ通えなくなってしまった子どもの学び舎としてスタートし、「子どもが笑顔に変わる場所」として 20 年間、新しい学習環境づくりに取り組んできた学校である。私は星槎中学校で多くの子どもと関わりながら本当にたくさんの笑顔に変わる瞬間と成長に立ち会うことができ、その一つ一つが今の私の財産になっている。しかしながらその中には「本気で笑っているのかな？」と疑問に感じる子どももいた。それがいわゆる高 IQ の子どもである。星槎中学校では 3 つの約束のもとそれぞれの個性を尊重し合いながら学業と集団生活、また自分自身について学んでいく。3 年間で自身の個性と向き合いながら他者と協調するすべを学んでいくが、高 IQ の子どもの中には相手に合わせて「笑ったふり」を身に着けてしまう子もいた。社会で生活していくうえでそのスキルは大切だが、「本当にこれで良いのか？」「この子達は楽しんでいるのか？」とモヤモヤした気持ちを抱えてきた。

SEISA アカデミーは星槎中学校の環境でも楽しみきれない上記のような子どもがトコトコ楽しみきりながら学校生活を送ることを目指した学び舎であると思っている。言うは易し、実際にスタートしてみると試行錯誤の連続で、それぞれの子どもが楽しいと思うことも、タイミングも、ハードルも違う。また 2E 傾向が伺える児童生徒も多く、毎日のように個性のぶつかり合いがおきている。それでも通っている子どもは悩みながら

も前向きに楽しみながら生活を送っている。その様子を見て「この取り組みは間違っていないんだ」と自信をもらえる2年だったように感じる。

個人的な次のステップはこの学習環境を「学校」として成立させることであると思っている。このSEISA アカデミーの学習形態は子ども達の2年間の変容を見る限り、教科を横断した、これからの社会を生き抜く力に直結しているものである。しかし、まだ客観的にその成果を測る方法が確立しておらず、周囲の大人や子ども自身も中々学習の成果を実感しにくい現状がある。その面でも今年度実施できた学習発表会はとても大きなものだったと感じている。探究の内容はバラエティにとんでいるが、その中には必ず科学的視点があり、いわゆる学習指導要領に記載された各教科の内容も多く含まれていた。子ども達が日々学んでいることを学習指導要領にひもづけ、対外的にも客観的にも学校で学んでいるものと同じにできるシステムがあれば、このSEISA アカデミーは学校になると思っている。そんな学校が全国にできれば、可能性をもった子どもが取り残されない社会ができると信じている。今後も「もっともっと楽しい学校」を目指し、SEISA アカデミーと共に歩んでいきたい。(龍)

☆☆

「科学する学校」を提案した宮澤名誉会長は、子どもたちが毎日ドキドキやワクワクを体感できる学校を目指していました。「科学する学校」を作るためには、現場の教員の声聞き、時代に即した教育を提供する必要性を感じています。これからの「科学する学校」、すなわち「SEISA アカデミー」を作り上げるために重要なのは、こどもたちの中に科学的な視点で物事を捉え、分析し、理解しようとする姿勢をどのように醸成するかです。「科学する」とは、広義にはあらゆる学問を含みますが、狭義には一定の目的と方法に基づき事象を研究する活動のことです。

「SEISA アカデミー」は、小学校から高校までの段階で、学習指導要領に基づく学びだけではなく、個々の興味や関心に基づいた研究活動を重視します。このような学びによって、「〇〇博士の卵」のような、独自の視点を持つ人材を育成したいと考えています。現在、私たちは VUCA 時代（「Volatility：変動性」「Uncertainty：不確実性」「Complexity：複雑性」「Ambiguity：曖昧性」）に突入しており、個々の力を活かし、生き抜く力を身につけるためには、このような教育がますます重要になってくると考えています。

「SEISA プレアカデミー」や「SEISA アカデミー」を通じて、小中高一貫教育や教科横断型教育、探求学習（マイプロジェクト）を実践し、これまでにない新しい教育の事例を創出する必要があります。また、学びの環境も非常に重要です。フリースクールや学びの多様化学校、通信制高校との連携、さらには海や川、山など自然を教材として活用した学習環境を整えることが大切です。さらに民間企業との連携（宇宙教育など）を通じて、先駆的な事例を創出し、社会に大きなインパクトを与えることを目指していき

たいと考えます。

最後になりますが、これからの時代、日本の教育システムは学齢に基づいて学ぶ内容を決めるのではなく、生徒が学びたいときに、必要なだけ学べるシステムを構築すべきだと考えます。例えば飛び級などの柔軟な教育制度を導入し、学びの選択肢を広げていく仕組みが必要です。

「SEISA アカデミー」は最終的には、既存の一条校では実現できない学習プログラムを提供し、日本を変革するチェンジメーカーを育成するための個別最適化された学びの場を作りたいと考えます。またこのような学校は、社会のニーズに応じて支援を受け、寄付を得られる存在となり、未来の教育を切り拓く役割として認められ、法律の壁を越え、日本で初めての小中高一貫校に認められるよう日々研鑽・チャレンジ・努力をしていきたいと思えます。引き続きご支援いただければ幸いです。(園)

☆☆

SEISA アカデミー開校の 2023 年 4 月より、主任として 2 年間務める中で常に自問自答していたことは SEISA アカデミーが社会にとって必要だと認めてもらうためには何をしたらいいか、ということです。星槎の建学の精神「社会に必要とされること創造し、常に新たな道を切り開き、それを成し遂げる」、まさにこの建学の精神にのっとなって SEISA アカデミーは誕生しました。文部科学省の「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」の研究団体にも採択され、注目もされました。開校 1 年目は 6 名という少人数の児童生徒、保護者でありながらもそれぞれが抱えている問題は深く、やっこの SEISA アカデミーにたどり着いた、という保護者の期待にどう応えていくか、かなり個性が強い児童生徒と毎日どう向き合うか、答えのない中を必死で、手探りで進んできました。SEISA アカデミーは高 IQ でありながらも発達に関して凸凹が激しく学習に対しても、発達課題に対しても特別な支援が必要とされる児童生徒(2E)の集まりです。様々な対応に追われ、目まぐるしい日々の中で気づいたことは、まずは社会に必要とされる云々、特異な才能を伸ばす云々よりも目の前の児童生徒としっかり向き合うこと、保護者の声をしっかり受け止めることがまず自分のやるべきことだということでした。普通の学校では「No」と言われるところを SEISA アカデミーとしてどう実現するか、For you の精神で行動してきました。一つひとつの事象に対して丁寧に対応、お互いに納得できる策を提案し、実践するときは子どもたちの様子を見ながら「待つ」。1 年目はこの対応の繰り返しだったように思います。2 年目に差し掛かるときに誰一人辞めることなく継続してくれたことが何よりもうれしく、少なくとも信頼関係の構築ができたことに安堵しました。

2 年目は 10 名の新入生を迎え 16 名でスタート。1 年目の経験を活かし、色々なことがスピーディーに対応できるようになりましたが、次は「中身」が問われる年。不登校経験者が多数だからといっていつまでも学校に慣れること、登校できるようになること

に焦点を置いては子どもたちにもスタッフにも成長はない。2年目としての役割と実績は今までの研究成果に記述してありますが、大きく言えば学習環境作りと学習意欲の向上、探求学習の成果が見える化、小集団の中での人間関係作りでした。人数が増えたことによりたくさんのいい相乗効果が生まれ、より学校らしく、子どもたちが生き生きと活動している光景が増えました。一方でトラブルが増えたことも事実であるがこれは全て子どもたちが成長するいい機会として、ピンチはチャンスと好転することを目指しました。

さて、次は3年目を迎える。新入生3名が加わるが、16名のうち2名が星槎中学へ進学のためSEISAアカデミーを卒業、18名で3年目を迎える予定です。ひとつ、目標に掲げているのは「居場所」から「学び舎」にしていくということ。2年間で「やっとここまで来た」という思いはあるが3年目はさらにここから「子どもたちの特異な才能」に注目し、いかに潰さず育むことができるか、に焦点をあてたいと考えています。子どもたちにはみんなそれぞれ「特異な才能」があります。その才能を引き出し、伸ばせる「学び舎」にすることが3年目のSEISAアカデミーの成すべきことです。毎年毎年の積み重ねでSEISAアカデミーを成長させ、いつしか社会に必要とされる学校として認められるように努力していきます。(森下)

☆☆

星槎の50年間の取り組みは、既存の教育システムにうまく適応できないこども達に対してそれぞれに必要な支援をしていくことであった。また、そのような環境づくりが建学の精神からも求められていることであった。社会情勢によって求められることも変化してきたが、こどもたちの困り感を見逃さず対応していくことは、社会の隙間に隠れがちな課題をすくいあげることであったともいえる。それゆえ、星槎は、行き過ぎた管理教育の課題、不登校の課題、発達障害を中心とした特別支援教育の課題などに起因する、自尊心をかなり傷つけられたこども達が求める場となっていた。それゆえ、丁寧、我慢強く、寛容な心持は、星槎の教員には必須の素養であったと言える。

ツルセミ、技能教育施設宮澤学園（現星槎学園）、星槎国際高等学校（広域通信制）、星槎中学校、星槎高等学校、星槎名古屋中学校、星槎もみじ中学校などの創設はまさに学びの場の創設であり、中等教育の場における学習の支援が中心となった。加えて、星槎大学・大学院などは社会課題を解決するための指導者の養成の場の創出であった。

これらの行動によりこの国の中で、ある程度の役割を果たすことはできたと感じているが、課題として認識していたのだが今までに十分取り組むことができなかったことが、本事業のテーマでもある「特定分野に特異な才能を持つ児童生徒への支援」であった。

星槎の得意分野は、「特別授業」であり「特別活動」だ。これらを通じてこども達が大きく成長していく姿は魔法を見ているようでもある。この良さを残しつつ、学校で多くの時間を占める授業でどのように教育活動を展開していくのが本研究事業のテ

マでもあった。SEISA アカデミーにおける授業は「発見と動機づけ」の場としてどのように機能したのであろうか。何しろ、丁寧に、我慢強く、寛容な心持だけではミスマッチになってしまうのである。

星槎で長きにわたり、教育の現場やそれらの創設に関わってきた立場から、この事業の困難さをいうと以下のようになるであろう。この国では「特定分野に特異な才能を持つ児童生徒への支援」は、長きにわたり中等教育におけるいわゆる「進学校」の役割にされて事なきを得たかようになってしまっていた。しかし、大学進学率が6割に迫り、高校卒業後の進路が8割以上進学となっている今、すでに先の進学校はがっちり社会システムにはめ込まれてしまっている。つまり「特定分野に特異な才能のある」こども達はその力を活かしていくには実に動きづらい社会になってしまっているのだ。

SEISA アカデミーは、それが未来の学校像になることを目指している。まだ走り出したばかりで確たるものはないが、現在通学している児童生徒の層が、それぞれ自分の時間を意味あるものとして活躍できる場が必要になることは明らかだと考える。(松本)

#### 【日本国憲法より】

第二十六条 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

② すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

#### 【教育基本法より】

##### (教育の目的)

第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

##### (教育の目標)

第二条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。

三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。

五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

##### (生涯学習の理念)

第三条 国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、

その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。

(教育の機会均等)

第四条 すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない。人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない。

2 国及び地方公共団体は、障害のある者が、その障害の状態に応じ、十分な教育を受けられるよう、教育上必要な支援を講じなければならない。

3 国及び地方公共団体は、能力があるにもかかわらず、経済的理由によって修学が困難な者に対して、奨学の措置を講じなければならない。

#### 【学校教育法より】

第二十一条 義務教育として行われる普通教育は、教育基本法（平成十八年法律第百二十号）第五条第二項に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

二 学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと。

三 我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

四 家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項について基礎的な理解と技能を養うこと。

五 読書に親しませ、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的な能力を養うこと。

六 生活に必要な数量的な関係を正しく理解し、処理する基礎的な能力を養うこと。

七 生活にかかわる自然現象について、観察及び実験を通じて、科学的に理解し、処理する基礎的な能力を養うこと。

八 健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養うとともに、運動を通じて体力を養い、心身の調和的発達を図ること。

九 生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸その他の芸術について基礎的な理解と技能を養うこと。

十 職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと。

## Ⅲ-2 今後の展望

等しく、平等であるべきことは「機会」であり、「教育」は、個々の能力に公正に個別最適化すべきことが、憲法および教育基本法に示されている。

本事業において、大変興味深いことは、当初の想定した計画通りに事業が推進しなかったことにある。これは私たち大人が考える「一般的」や「普通」が当てはまらなかったことを意味している。そうした中でアカデミーの子どもたちの試行錯誤はもとより、アカデミーに参画した教員を含めた大人が、それまでの自分の固定概念や学校の「普通」を揺さぶられ、その都度試行錯誤して、変化し続け、これまでの平等な教育から抜け出したことに最大の成果がある。

子どもたちは本来多様であり、ありのままの自分であることが如何に困難であるかということや、教育は公正に個別最適化（変化）することが可能であることに気づけたことは、報告内容の通りである。

星槎の創設者である故宮澤保夫が亡くなる寸前まで「本当に子どもたちは幸せなのか」と、その問いを探究し続けたことからわかる通り、教育の在り方はひとつのメソッドとして決定、固定できるものではないのである。

一方、実証研究で定められた期間は、一区切りつくことになるが、最大のテーマである「発見と動機付け」に対して、未だ道半ばというところである。特に個々の「好き」を発見し、没入感（イマーシブフィーリング）を継続し、学校の枠組みを超えて昇華させることについては、まだまだ研究すべき点がある。

さらに、個人の中で秀でた才能を認め生かす教育の研究は、こうしたアドバンスドラーナーに限らず、全ての子どもたちに必要な教育であり、通常学級におけるインクルーシブ教育の推進にとって重要な役割を果たすものなることから、本事業を継続し、多様性が認められ誰ひとり取り残すことのない、主体的な学びの在り方について研究し、日本の学校の未来像を提案していきたい。

学校法人星槎 SEISA アカデミー担当理事 蓮田 亮大

SEISA アカデミー  
「特定分野に特異な才能のある児童生徒への  
支援の推進事業」成果報告書  
2023-2025

著者 SEISA アカデミー  
発行者 SEISA アカデミー運営指導委員会  
編集 松本幸広  
発行日 令和5年2月28日  
連絡先 academy@seisa.ed.jp